源子盛衰記

リ5
5356
1

リ5
5356
1

源平盛衰記の版本及び寫本

版本に良書なし

源平盛衰記は古來有名の軍記物語にして、幾多の版本あるに拘らず、無訓無點にして通誦に適せざる「慶長活字本」を除きては、何れも誤讀を以て滿たされたる「片假名本」若しくは片假名本の誤讀を承けて陳々相因れる惡書に非ざるは無くして、未だ嘗て一部の良書をも見るを得ざるは、一見甚だ奇怪なれども、これには自ら二個の原因あるが如し。其一は盛衰記の各處に散點せる難句と擬漢文體の難文とは、之を讀むこと容易ならざるに因り、其二は上梓以前の寫本にして、善く古訓を傳へたる良書の極て稀にして、偶々之あるものは固く好書家の筐底に秘せられて、世に出づる機會無かりしに因るなり。本書に掲げたる擬漢文の如何に難澁のものなるかは、左の一節を見て之を推すべし。

【慶長活字本】　一國田地帝皇進止實少皆爲三寶之領九州正稅國家用途不幾併宛佛界之供然則釋梵四天廻眸照之龍神八部以目視之十六大國加々留國有五百中國加々留境有法弘還有滅時道盛必有衰國　（卷一、澄憲祈雨）

普通の漢文は、平凡なる漢學者も尙之を讀むべし。然れども、源平盛衰記の擬漢文に至りては、古傳を

得るに非ざれば、容易に之を讀むべからず。今その正訓を示すに先ちて、古版本が如何に之を誤讀せしかを示さんとす。盛衰記中、最も廣く行はれ、且つ慶長活字本に次ぎて古くして、平假名本、繪入本、その他諸版本の底本となれるものを片假名本と爲す。故に諸版本の代表者として片假名本の讀方を示さんとす。左記劈頭の「卜領」は上句を下句に入れて誤讀せしもの也。

【片假名本】　卜領　一國田地帝皇進止實　少皆爲三寶之領。九州正稅國家用途不幾。併宛佛界之供。然則釋梵四天廻眸照之龍神八部以目視之。十六大國加々留國。有五百中國加。々留境　有法弘。還有滅時。道盛　必有衰國。

見るべし、此訓讀の、殆ど囈語と異なる無きを。然れども此書は原文を其儘に存したれば尙研究の餘地あれども、此囈語を承けて、其儘に假名交り文に改めたる「平假名和註本」の愚昧に至りては、根本的に原文を破滅せしものにして、其罪輕しと謂ふべからず。左に揭げて一噱に供す。

【平假名本】　一國の田地をぼくりやうす。帝皇進止まことにまれ也。みな三ぼうの領とす。九州の正稅國家用途いくばくならす。しかしながらぶつかいの供にあつ。しかれば則しやくぼん四天まなじりをめぐらしてこれをてらす。龍神八部目を以てこれをみる。十六大國くはゝる。加へて國に留まる。五百中國のくはゝる有。くはへてさかひに留て。法のひろまる事有。かへつて減する時有。みちさかんにしてかならす國のをとろふ有。（※は平假名本が私改せるなり）

水戸藩にて巨資を投じて出版せる參考源平盛衰記の訓點如何と見るに、此書は流石に漢學者の校訂を經たるものなれば、漢文の訓點上に改正せられたる所尠からざれども、尙之を讀み得ずして片假名本の誤讀を繼承せるもの尠しとせず。請ふ其訓點を見よ。

【參考本】　一國田地。帝皇進止實少。皆爲三寶之領。九州正稅。國家用途不幾。併充佛界之供。然則釋梵四天廻眸照之。龍神八部以目視之。十六大國加。加留國。有五百國加。加留境。有法弘。還有滅時。道盛必有衰國。

見よ左線を施せる約卅字は水戸の漢學者も尙之を讀み得ざりし事を。其他推して知るべきなり。盛衰記に良版本なきは、更に絮說するを要せざるなり。

古寫本に良書あり

源平盛衰記には古寫本、極て少くして嘗て之を見るを得ざりしが、近日偶然之を見ることを得たるもの二本あり。一は黑川家の秘藏、一は松井家の珍藏にして、啻に稀世の珍本たるのみならず、兩書ともに源平盛衰記中の難讀の個處には、古訓と認むべき讀方を附したり。此寫本の事は次に云ふべければ、茲には只上記の難文を如何に訓讀せしかを示さんとす。

【松井本】　一國田地帝皇進止實少皆爲三寶之領九州正稅國家用途不幾併宛佛界之供然則釋梵四天廻眸照之龍神八部以目視之十六大國加々留國有五百中國加々留境有法弘還有滅時道盛必有衰國（黒川本は其訓讀方畧ゝ同じ、左傍の黒點は、便宜の爲に句切を示す）

何人も讀み得ざりし難文に、斯くまで通暢なる訓點を附したるは、思ふに古傳に據れるものなるべし。支那六朝の駢驪體の美文に心醉せし平安朝時代の漢文の流を酌める鎌倉時代の擬漢文は、務て對句文を用ひたるなり。見よ、始の二句は十六字宛の對句にて「然則」以下の二句は八字宛の對句、その次の二句は九字宛の對句、終の二句は六字宛の對句なるを。此對句といふことに心附かずしては、當時の擬漢文體の文章は讀むべからず。此寫本が二本とも、是等の難文に對して、殆ど同一の訓點を施したるは、確に據る所の原本なくんばあらず。此二本が古傳の良書たるべきは殆ど疑を容れざるなり。

諸本の大要及び體裁

版本の種類尠からずと雖も、片假名本は、特に廣く行はれ、幾多の版本皆之に據りたるものなれば、今は、是等の諸本を擧ぐるを避けて、片假名本の原本たる「慶長活字本」、「片假名本」及び慶長活字本の原寫本と認むべき「黒川本」黒川本の姉妹本と見るべき「松井本」に就きて聊か記す所あらんとす。

【慶長活字本】　豐太閤の征韓の役に、朝鮮の銅製活字を鹵獲して還るに及び、活字の便なること初めて弘く世に知れ渡り、木彫活字を新に造りて古書を印行すること、大に世に行はれたれば、古事記、日本書紀等の諸書續々として印行せられ、當時の活字本にして今日に傳はれるもの亦尠しとせず。本書、亦、實に此時に出でたるなり。然れども當時の活版技術は甚だ幼稚にして漢文にも反點を附せず、亦、傍訓を附せざるを以て常とせしかば、古來の訓讀方は、之が爲に湮滅せしもの蓋し尠からざるべし。彼の日本書記の如きも、卜部家の古寫本の傳はること無かりせば、活版本の流行と共に古傳の訓讀方は湮滅に歸し、復た之を讀むこと容易ならざるに至りしなるべし。其然らざりしは實に古寫本の賜なり。今慶長本の如何なる體裁のものなるかを左に示すべし。

【慶長活字本】　其ニ貫首ハ三千衆徒ニ代テ流罪ノ宣旨ヲ蒙ラセ給フ上ハ衆徒貫首ニ代リ奉テ命ヲ失ハン事全クウレヘニ非ス唯トク〳〵御輿ニ召レヨヤトテ御手ヲムスト取奉引立御輿ニ奉舁乘座主ハ戰々乘給ケリ（卷五、澄憲賜血脈）

慶長本は盛衰記の最古版にして、版本中、最も正確なるものなれども、之を古寫本に對照すれば、脫句脫字、誤植、誤讀等、散點せるを見るべし（其例證は下に掲ぐ）。此書は茲に示すが如く片假名交りにして傍訓なく句點なく、反點なく、假名に清濁の區別なし。

【片假名本】　慶長活字本に傍訓、句點、反點を施し、假名に濁點を加へ、且つ慶長本に在りては、

只卷頭にのみ列記しありたる目錄を本文の間に移して、通讀し易からしめたるものを本書となす。故に此書は最も廣く世に行はれたれども、此書には、慶長本の誤脫を正せる個處は殆ど無くして、慶長本に見えざる新誤脫を生じたるもの尠からず（例は下に示す）。加之、校訂者無學にして、訓讀の際に甚しき誤讀を爲し、註釋文、異說、由來記等の記入文を本文に混同して文脈の連絡を錯亂し、殊に擬漢文體の文章に至りては、殆ど全く讀み得ざりしものと見えて噴飯すべき誤讀の訓點を附したり（凡ての例證は下に掲ぐ）。然るに多くの讀者は慶長本あるを知らず、又、正確の古寫本あるを知らずして此書を正確なる印本と誤認したるを以て、平假名和註本の如き、若しくは參考盛衰記の如きも、皆此書の誤を承けて之を後世に傳へたり。今茲には上記の慶長本と同一の文につきて單に文面の體裁を示さんとす。此書の原本の、慶長本なりしこと毫も疑を容れざるなり。

【片假名本】　其ニ貫首ハ三千衆徒ニ代テ流罪ノ宣旨ヲ蒙ラセ給フ上ハ。衆徒貫首ニ代リ奉テ。命ヲ失ハン事。全クウレヘニ非ズ。唯トク〳〵御輿ニ召レヨヤトテ。御手ヲムスト取奉引立御輿ニ奉昇乘座主ハ戰々乘給ケリ。

【古寫本の一、黑川本】　寫本を版本に比する時は、概して其校正粗略にして類字の誤寫、若しくは一二字の誤脫あるを免れざれども、之を交互に對照する時は、其誤脫なるは、判然知り得るが故に、盛衰記の如く、良版本なき古書に在りては、古寫本を對照する事極て切要なり。平家物語には、古寫本の傳はれるもの尠からざれども、盛衰記に至りては、殆ど之を見る能はず。此時に方りて一部四十八卷完璧の黑川本（黑川眞道氏秘藏）あるは、實に珍中の珍たり。特に此古寫本には、難語難句に傍訓、反點を附しあるを以て、流布本の脫句、脫字、誤字を正し、且つ其誤讀を正すの上に於て他に得べからざる有益の書たり。此古寫本は、もと、幕末有名の好書家にして、巨萬の資を投じて丹鶴叢書を上梓せる紀州新宮の領主水野土佐守忠央侯の所藏なりしが、黑川家の先代なる眞頼文學博士が水野家より購入して嚴に其篋底に秘し、嘗て門外に出すを許さゞりし者たり。中に「和學講談所」印及び「虛舟無我」印あり。此書中の第三、第五、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二の八卷は、足利時代に明國に赴ける最後の使節として、又、幾多の著書あるを以て有名なる策彥和尙の手蹟と鑑定せられたるものにして、他の諸卷も同時代に成りたる者の如し。內面に銀紙を貼れる表紙は、幽雅の古色を帶び、見るからに、好書家をして垂涎措く能はざらしむるものあり。書中の文字に、古寫本にあらざれば見るを得ざる字體あり、祇候の祇を祖に作り、杯を坏に作り刺を刺に作るが如き其一例なり。普通本の妹尾の文字を、正しく妹尾（妹尾はイモヒナリセノヲヒに非ず）と書き、普通本に悉く誤れる攝祿を、悉く攝籙と書けるが如きも、此寫本の正しき一證と爲すべきなり。以て此書が如何に良書なるかを知るべし。

此書の本文は概して慶長本と同じくして、只慶長本よりも送り假名多く、且つ叙事文の間に轉倒語を用ふること稍〻尠きの差あるのみなれども、慶長本に絕無なる傍訓、反點の施しあるは、此書の一大長所

とす。左に同一個處につきて文面の體裁を示す。

【黑川本】　其レニ貫首ハ三千衆徒ニ代テ流罪ノ宣旨ヲ蒙ラセ給フ上ハ衆徒貫首ニ代リ奉テ命ヲ失ハン事全クウレヘニ非スタヽトク〳〵御輿ニ被召ヤトテ御手ヲ取リムスト奉引立御輿ニ舁乘セ奉ル座主ハ戰々乘給ヒケリ　（左線は反點の脫）

【古寫本の二、松井本】　此の書は東京高等師範學校教授松井簡治氏の秘藏にかゝり、黑川本の姉妹本と見るべきものにて、黑川本に於て普通本と異なる個處なども殆ど全く此寫本と同じ。只此書は黑川本の片假名交りなるに反して平假名交りなると、假名書きの語句の稍〻多きと、叙事文中に於ける引用語外の轉倒語が概ね假名交り文と成りたると、傍訓訓點の甚だ綿密なるとを異なりとするのみ。難語難句にして古版本の悉く讀み誤れる個處に就き之を黑川本に對照するに、殆ど符節を合するが如くに一致せるを見る。黑川本、松井本の二本が等しく古傳を得たるものなることは殆ど疑を容れざるなり。此書は僅に第十卷までの零本にして、而かも第五卷と第六卷との下半を缺きたれども鳥子紙列蝶綴にして流麗優美の筆を以て平假名交りに寫したれば、雅客をして展玩措く能はざらしむるものあり。左に同一個處に就きて文面の體裁を示す。此書には假名書き多く、傍訓多く、轉倒體の語句は、引用語の外には極て稀なること、既に云へるが如し。

【松井本】　それに貫首は三千衆徒に代て流罪の宣旨をかうふらせ給ふ上は衆徒貫首にかはり奉て命をうしなはん事全うれへにあらずたゝとく〳〵御輿にめされよやとて御手をとりむすと引立奉り御輿にかきのせたてまつる座主は戰々乘給ひけり

慶長活字本の脫句、誤植及び誤讀

慶長本は版本中の最良書なれども、之を古寫本と對照すれば、僅に五六冊を讀み行く間に、渉からざる脫句、誤植、誤讀あるを見るべし。左に其二三を記す。

【慶長本】　此局ノ妹ノ侍從ヲ呼テ此事ヲ語　（卷二、清盛息女）

【片假名本】　此局ノ妹トノ侍從ヲ呼テ。此事ヲ語。　（トは妹の語尾なり）

【黑川本】　此局ノ妹ニ侍從ト云フ女房アリ則成範卿ノ乳母ナリケレハ三位思ノアマリニ侍從ヲ呼テ此事ヲ語ル　（松井本同じ）

見るべし、左線を施せる二十九字は、慶長本先づ之を脫し、片假名本、その誤脫を承けたるを。平假名本以下の諸版本には、片假名本の誤脫を襲沓せざるなし。今一々擧げず。

【慶長本】　關白殿コレヲハ爭可知召ナレハ大内ノ御直廬ヘト思食テ常ノ御出仕ヨリモ花ヤカニ　（卷三、殿下事會）

【片假名本】　關白殿コレヲハ爭可知召ナレハ。大内ノ御直廬ヘト思食テ。常ノ御出仕ヨリモ花ヤカニ。

【黑川本】　關白殿コレヲハ爭カシロシメスヘキナレハ同十月廿一日ニ主上御元服ノ定メアルヘキニテ大内ノ御直廬ヘト思メシテ常ノ御出仕ヨリモハナヤカニ

（松井本同じ。廬は誤寫ならん）

左線を施せる二十一字なくては、關白遭難の日も分らず、又關白が、此日何故に平日の參内よりも花やかにして、參内せしか、明ならず。

【慶長本】　無官ナレハ徐ニシテ左右ノ手ヲ土ニツキ　（卷一、殿上闇打）

【片假名本】　無官ナレバ徐々トシテ左右ノ手ヲ土ニツキ

無官なるを以て殿上に同行せず、自ら除物となりて土に手をつきゐたるなり。松井本には「除にして」と傍訓しあり。徐は慶長本の誤植なるを、片假名本は其智囊を絞りて「徐々トシテ」と讀ませたるなり。

【慶長本】　兩人勒負尉ニナサル　（卷四、靜憲止御幸）

【片假名本】　兩人勒負尉ニナサル。

松井本「靱負尉」とあり。慶長本の誤植なること明なり。片假名本が「勒負尉」と讀みたるは笑ふべし。

【慶長本】　院宣ノ下モ忝シ王土ニハサマレテ　（卷五、山門落書）

【片假名本】　院宣ノ下モ忝シ。王土ニハサマレテ

黑川本、松井本共に「王土ニハラマレテ」とあり。皇國に生れたるを云ふなり。挾マレテとは云ふべからず。

【慶長本】　鳥羽ノ御所ニ被候セシ時ニハ　（卷七、成親流罪）

【片假名本】　鳥羽ノ御所ニ被候セシ時ニハ。

黑川本には「祇候セシ時ニハ」とあり。慶長本の誤植を承けて、片假名本の讀み損じたるなり。

【慶長本】　見人聞人モ敬スト云事ナシ　（卷一、忠盛卒）

【片假名本】　見人聞人モ不敬ト云事ナシ。

黑川本には「見ル人モ聞ク人モウラヤマスト云事ナシ」とあり。松井本亦同じ。忠盛の後生を羨まざるものなきを云ふ。慶長本は輕忽にも、此假名書きを「ウヤマハズ」と讀みて「敬」の字を宛てたるなり。

片假名本の誤脫

版本中の最も良本と稱せらるゝ慶長本にすら、上述の如く、尠からざる誤脫を見るなり。片假名本に至りては、啻に此誤脫を正すこと能はざりしのみならず、更に幾多の誤脫を加へたり。左に掲ぐるは、假名交りの叙事文中にあるものにて、讀み易き個處なれば、苟も文字ある者の、讀み誤るべきに非ざるな

り。假名交り文すら、讀み得ざりし程なれば、難澁なると難澁ならざるとに拘らず、本書中の擬漢文は殆ど全く之を讀み得ずして抱腹すべき誤讀を爲したるを見るなり。但し擬漢文の事は後に云ふべければ、茲には假名交り文中に挾まれたる語句中の、甚しき誤のみの二三を示さんとす。小なる誤に至つては每紙に殆ど之なきは無し。

【慶長本】　劔ヲ帶シ沓ヲ著ナカラ殿上ニ昇ル事ヲ被免シカ共　（卷六、小松殿教訓）

【片假名本】　劔ヲ帶シ冠ヲ著ナガラ殿上ニ昇ル事ヲ被免シカ共。

黑川本には「劔ヲ帶シ沓ヲ著ナカラ殿上ニ昇ル事ヲユルサレシカ共」とあり。劔履昇殿を許可せられたるを云ふなり。慶長本は正確なるに、片假名本は「著」を「ハキ」と讀むことを知らずして「沓ヲ著」にては穩ならずと考へて、「沓」を「冠」に私改せるなり。

【慶長本】　大政入道ノ我意ノ所行　（卷三、左右大將）

【片假名本】　大政入道ノ雅意ノ所行

慶長本の如く、古寫本にも皆「我意」とあり。我儘なるを云ふなり。

【慶長本】　神輿ノ御動座是ソ始也ケル權中納言匡房ハ和漢ノ才轄世ニユルサレ廉直ノ政理ニ私ナキ人也此事大ニ歎申給ヘリ師忠惡樣座執申サズハ關白御憤アランヤ關白賴治ニ下知シ給ハスハ神明御恥ニアヘ給フベシヤ

黑川本、松井本ともに「是ダ、事ニアラス」とあり。慶長本の「直事」は「只事」の宛字なるに、之を「直事」と讀みては、其意義の通ずべしや。

【慶長本】　注意趣可上奏　（卷二、六波羅臨幸）

【片假名本】　任意趣可上奏。

黑川本には此處、訓點を脫し、松井本には「意趣を注して」とあり。意見を注記して上奏せよと云ふ事にて、意趣の如く存分に上奏せよと云ふ事にはあらず。片假名本が「注」の字の讀方を知らずして「任」に私改し、マカセと讀みたるは笑ふべし。

【慶長本】　今度蜂起之間僧正可與力者可免衆勸之由　（卷二、六波羅臨幸）

【片假名本】、神輿ノ御動是ゾ始也ケル。權中納言匡房ハ。和漢ノ才轄世ニユルサレニ。直ノ政理ニ私ナキ人也。此事大ニ歎申給ヘリ。師忠惡樣座執申サズハ。關白御憤アランヤ。關白賴治ニ下知シ給ハス。廉ハ神明御恥ニアヘ給フベシヤ

慶長本の此文は何人にも讀み得ざるべし。校正の杜撰なる實に驚くべし。

【慶長本】　是直事ニアラス　（卷一、王莽事）

【片假名本】　是直事ニアラズ。

【片假名本】　今度蜂起之間、僧正可與力者可免衆勘之由。

黒川本には訓點を脱したれども、松井本には「僧正與方すへくは衆勘を免へきのよし」とあり、僧正にして味方せば大衆の勘當を免除すべしとの意なり。片假名本の訓讀は全然囈語に等しくして何の意なるを知るべからず。假名交り文の間に挿入せられたる簡短の擬漢文すら讀み得ざりしこと斯の如し。

【慶長本】　天子ノ親ニ奉別ヌレハ　（卷六、諫問）

【片假名本】　天子ノ親ミニ奉別ヌレバ。

天子が親（父母）に別れ奉るを諒闇と云ふなり。讀み誤るべきに非ず。松井本には「親に」と傍訓しあり。此他「書傳タル水莖ノ跡」を「書傳タル水莖ノ跡」と讀み、黄金仕立の刀に「金造ノ太刀」とあるを「コガネヅクリノ太刀」と讀ますして「金造の太刀」と讀みたる類、擧げて數ふべからず。

【慶長本】　今ハ源氏ニオイテハ無カ如シ　（卷四、山門御輿振）

【片假名本】　今ハ源氏ニオイテハ無力如シ。

黒川本には傍訓を施して「無カ如シ」とあり。昔は源平對等の勢力なりしに、今は有れども無きが如くに衰へたるを云ふなり。實力は有れども、外面には無力なるが如く見ゆとの意には非ず。片假名本は版下を書くに際して無力と誤書し、さて之に「力」と傍訓せるなり。

【慶長本】　無云甲斐下蔕ノ過分ニ成上朝恩ニ誇ル餘　（卷五、成親被召捕）

【片假名本】　無云甲斐下蔕ノ過分ニ成上リ朝恩ニ誇ル餘。

黒川本には「過分ニ成上リ」とあり。下賤の者の急に成上りて立身せるを罵倒せる語なり。今日の謂はゆる「成上り紳士」又は「成金黨」などの「成」なり。

【慶長本】　一條院御宇大納言行成ノ末殿上人ニテ御坐ケル時　（卷七、日本廣俠）

【片假名本】　一條院御宇大納言行成ノ末殿上人ニテ御座ケル時。

「末の殿上人」と云ふことあるべしや。黒川本、松井本ともに假名書きにて「イマタ殿上人」とあり。末を誤りて末と書き、一轉して斯る誤訓を附したるなり。

片假名本の註釋混入

古寫本は云ふに及ばず、慶長本に在りても、註解文は割書して本文と區別し、異說、由來記等の記入文は、之を低書して本文と區別したるに、片假名本にありては、註解文は悉く本文に混同し、異說等も概して之を本文に混入接續して彫刻したれば、文脈の連絡を失ひ、文意をして不明ならしめたる所尠からず。異說等の混入の例は、其文長ければ茲に記さず、只註解文の混同の例を採りて只一ヶ處限り示すべし。

【黒川本、及び松井本】　文德天皇御宇齊衡元年ニ左ニ忠仁公良房冬嗣公二男右ニ西三條

右大臣良相公同五男朱雀院御宇天慶八年ニ左ニ清慎公實頼一男真信公右ニ九條右大臣師輔公同二男後朱雀院御宇寛德二年ニ左ニ大二條關白敎通公御堂二男右ニ堀川右大臣頼宗公同三男二條院御宇應保元年ニ左ニ中山關白基房公法性寺關白二男右ニ後法性寺關白兼實公同三男相並給ヘリキ　（卷一、一族官位昇進）

【片假名本】「文德天皇御宇。齊衡元年ニ。左ニ忠仁公良房冬嗣公。二男西三條右大臣良相公。同二男朱雀院御宇。天慶八年ニ。左ニ清慎公實頼。貞信公一男。右ニ九條右大臣師輔公。同五男朱雀院御宇。應保元年。左ニ中山關白基房公。法性寺關白二男右ニ後法性寺關白兼實公。同三男相並給ヘリキ。

此一節は兄弟相並びて左右大臣となれる先例を列擧せしものなれども、片假名本は註解文を本文と混同して彫刻したるのみならず、脫字あるが上に句點甚だ杜撰なれば、殆ど文義を知るべからず。片假名本以後の版本が皆斯る惡本に倣ひたるは奇怪なりと謂ふべし。

片假名本の擬漢文は殆ど全く誤讀なり

上に示せる誤脫類は、假名交りの叙事文中に在るものなれば、何人にも讀み得べきものたるに拘らず、尙且つ斯の如く杜撰なり。されば此書中に散在せる牒狀、願文、宣旨等の擬漢文に至りては、誤讀定めて多かるべしとは思はるれども、全部の擬漢文が殆ど全く誤讀せられたるべしとは、何人も豫想し得ざるべし。僅に六七卷を讀みたるのみにて全豹を推すべきに非ざれども、此六七卷內の擬漢文は、一文として滿足に讀み得たるもの無ければ、以下の諸卷、亦、凡て誤讀を以て充たされたること殆ど疑を容れざるなり。此誤讀を承けて、平然として之を假名交り文に書き改め、貴重なる古文書を破壞して囈語の行列となしたる平假名本の愚に至りては、何の辭を以て之を評すべきを知らざるなり。擬漢文の誤讀を示すには、六七卷內の悉例を示すのみにても、頗る多くの紙數を要するを以て、玆には本書の第一着に出でたる卷三、嚴島御幸の祈願文の一文を揭ぐるに止むべし。但し此一例は片假名本の體裁を示す目的にあらず、又、古寫本の體裁を示す目的にあらざるを以て、對照上に必要ならざる傍訓等は多く省略に從ひたり。

片假名本の讀方　左線は誤讀を示す

側聞登中嶽而延齡焉漢武建白茅之封祀
高祖而獲子矣。簡狄感玄鳥之至。神靈福助
前鑒既明者歟。伏惟四德雖疎。六行雖闕。初

古寫本の讀方　句點は新に加ふ

側聞登中嶽而延齡焉。漢武建白茅之封祀。
高祖而獲子矣。簡狄感玄鳥之至。神靈福助。
前鑒既明者歟。伏惟四德雖疎。六行雖闕。初

侍姑山而承恩早編榮名於九々之列後居
后房而正位更守謙退於疑々之心忝爲聖
皇之母儀遂賜仙院之尊號造次所慕者天
祚之無窮也寤寐所思者帝業之繁昌也于
朝于暮祈佛祈神於是伊都岐島社者極聖
和光之砌大權垂跡之地青松蒼柏之託根
多送五百廻之歳月貴賤高下之運心不遠
千萬里之風煙海中之仙島也省鼇波之浮
蓬壺沙濱之靈祠也知龍宮之近苔壖可以
採不死之藥可以得如意之珠絶勝之趣讃
不可盡因茲現當之善利殊抽豫參之精誠
蓋鄉法皇之虛舟遂弟子之懇符也旅泊夜
深幽月照懷鄉之夢羇中春暮殘花爲行路
之資遂就粉楡之社壇敬設清淨之法會廼
奉鑄顯大明神本地正體御鏡三面奉書金

字紺紙妙法蓮華經一部八卷無量義經一
卷觀普賢經一卷般若心經卅三卷大日
經一部十卷理趣經一卷大日眞言百遍十
一面眞言百返毘沙門眞言百返此中於大
日經者所奉納銀笧也其外師子馬鞍刀劍
弓矢各冶金銅殊盡彫鏤復有色馬復有八
女共施丹青限以三十三專捧幣帛更副鈿
笛其勤非一其誠無貳以此財施法施之功
能仰彼權化實化之納受于時岸風之拂齊
席香煙添栴檀之薰天水之及瑞雛潮聲助
梵唄之曲所生勝因併資法樂先捧白業
奉祝紫宮齊數久遠屢獻桂文麻姑之笙繼
嗣恢弘旁耀瓊蕚金枝光弟子生涯尙遙退
病源於他土壽域新兆移南山於前庭若夫
現在生之運命有限百二十之春秋遂過之

夕不誤順次之往生速詣安養之世界夫當
社者尋內證者則大日也有便于祈日域之
皇胤思外現者亦貴女也無疑于答女人之
丹心我既爲本朝之國母旁足蒙當社之神
恩抑至心繫念之輩朝祈暮賽之人自古
迄今皇羅雲布或雖有槐棘之尊貴敢不
及院宮之往詣而弟子一者被扶當時之信
力一者被引多劫之宿緣忽詣此場始蹈其
跡若於今日而無揭焉之驗恐令後人生疑
惑之心伏乞玄應成就素望圓滿然則往還
之間無風波之難先知冥助之潛通心意之
裏滿大小之願新顯利益之現證年年歲々
彌致欽仰子々孫々永可歸依神而有可知
必垂答貺重請禪定大相國今世拂友氣
於三觀之窓來世證妙果於一佛之土弟子

夕不誤順次之往生速詣安養之世界夫當
社者尋內證者則大日也有便于祈日域之
皇胤思外現者亦貴女也無疑于答女人之
丹心我既爲本朝之國母旁足蒙當社之神
恩抑至心繫念之輩朝祈暮賽之人自古
迄今皇羅雲布或雖有槐棘之尊貴敢不
及院宮之往詣而弟子一者被扶當時之信
力一者被引多劫之宿緣忽詣此場始蹈其
跡若於今日而無揭焉之驗恐令後人生疑
惑之心伏乞玄應成就素望圓滿然則往還
之間無風波之難先知冥助之潛通心意之
裏滿大小之願新顯利益之現證年年歲々
彌致欽仰子々孫々永可歸依神而有可知
必垂答貺重請禪定大相國今世拂天氣
於三觀之窓來世證妙果於一佛之土弟子

所以憑彼懇篤之至亦任知見敬白。

所以憑彼懇篤之至亦任知見敬白。

今後の盛衰記發行者に望む

古寫本を對照せしは僅に六七卷に過ぎざれども、上述の如く驚くべき誤脫、誤讀あり。明治以後盛衰記を印行せしもの、帝國文庫本、國民文庫本等を始めとして、其數二三に止まらずと雖も、一も此誤讀の修正に留意せしもの有るを見ず。斯くの如くにして止まずんば、後人をして盛衰記は不可解の囈語の散點せる惡書なりと誤想せしむるに至らん。歎くに堪ふべけんや。不肖自ら揣らず、通俗日本全史發行の事務を擔任して、版本の脫誤の甚しきを知り得たるを以て、今後に盛衰記を發行する者の注意を喚起せんが爲に、版本の脫誤を指摘すること爾り。終に臨み、貴重なる古寫本の借覽を許容し給ひたる黑川松井兩氏の厚意を鳴謝し、併せて此書の原稿校訂に從ひたる大石氏、並に活版校正の事に從ひ、古寫本と對照して多大の苦心を費されたる石丸、秋山、市野諸氏の勞を多謝す。

大正元年十一月

種村宗八　しるす

源平盛衰記卷第一目録

平家繁昌并德長壽院導師事
五節夜闇打。付五節始并彫成玉臣下事
兼家季仲基高家繼忠雅等揖子付悪盛卒事
清盛行大威德法付行隆天并清水寺詣事
清盛擂化鳥并一族官位昇進付禿童并玉恭事

昭和九年三月十七日寄
種村宗八氏贈

外二十四冊

藍色 里川本

赤くこれ 松井本

里川本ニハ小野ゝ宮記無レ之 松井文モ如レ此

源平盛衰記 巻第一

平家繁昌井徳長寿院導師事

祇園精舎ノ鐘ノ聲諸行無常ノ響アリ。沙羅雙樹ノ花ノ色盛者必衰ノ理ヲ顯ス。奢レル者モ久カラズ。春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ心モ終ニハ亡ヌ。風ノ前ノ塵ニ同シ。遠ク誠ニ異朝夏殷周秦趙高漢王莽。梁周伊。唐祿山。皆是舊主先皇ノ政ニモ不隨。民間ノ愁世ノ亂ヲモ不知シカバ。又カラズシテ滅ニキ。近ノ事ニ我朝承平ノ將門。天慶ノ純友。康和ノ義親。平治ノ信頼。後レル心モ武キ事モ。トリ〳〵ニ有ケレ共。下ヲカク入道太政大臣平清盛ト申ケル人ノ有様。傳聞コソ心モ詞モ及ハレ子極武天皇第五ノ王子。一品式部卿葛原親王。九代ノ後胤讃岐守正盛孫。刑部卿忠盛嫡男也。彼親王御

子高見王ハ無官無位ニノ失給ニケリ其御子高望王ノ時寛平元年五月十二日ニ始テ平姓ヲ賜テ上総介ニ成給シヨリ以来忽ニ王氏ヲ出テ人臣ニ連ル其子鎮守府将軍良望後ニハ常陸大掾國香上野國香ヨリ貞盛経衡正度正衡正盛ニ至マテ六代ハ諸國ノ受領タリトイヘ共未殿上ノ仙籍ヲバユルサレズ忠盛朝臣備前守タリシ時鳥羽院御願徳長壽院トテ鳳城ノ左鴨河ノ東ニ三十三間ノ御堂ヲ造進ジ一千一體ノ観音ヲ奉居勧賞ニハ闕國ヲ賜ベキ由被仰下但馬國賜ル其外結縁経營ノ人手足奉公ノ者マテモ程々ニ隨テ蒙勧賞真實ノ御善根ト覺エタリ崇徳院御宇長承元年壬子二月十六日ニ勅願ノ御供養有ヘシト公卿僉議有テ同二十一日ノ午ノ一點ト

被定タリケルニ其時刻ニ及テ大雨大風共ニ黒カリケレバ延引ス同廿五日ニ又有僉議廿九日八天老日也勅願ノ御供養宜シカルベシトテ再被遂ケルニ氷ノ雨大降牛馬人畜打損ズル計ナリケレバ上下不及出行又延引ス禅定法皇大ニ被歎思召ケリ昔近江國ニ有佛事ケルニ風雨煩ヒ度々ニ及ケレバ甚雨ヲ陰谷ニ流刑シテ堂舎ヲ供養スト云ヘリサレバ雨風鎮有ヘキカト云議アリ尤可然トテ諸寺ノ高僧ニ仰テ御祈アリ度々延引ノ後重テ有僉議同年三月十三日曜宿相應ノ良辰ナリトテ其日供養ニ被定御導師ニハ天台座主東陽房忠尋僧正ト聞ユ臨期日ニ一人三公卿相雲客洛中邊土貴賤上下参集聴聞結縁シケリ當座主僧正ハ顕密兼學ノ法燈智辯無窮ノ

秀才也。説法舌和ニシテ。辯智詞滑也。未世ノ富樓那辯士ノ
舎利弗ト覺タリ。聽聞集會萬人ハ。隨喜ノ涙ヲ流シ結縁
群參ノ道俗ハ歡喜ノ袖ヲ絞ル。無始罪障ノ雲消ルカト思
ヒ。本有月輪ノ光照スカト疑。説法ハ三時計ナリケルヲ。聽
衆ハ刹那ノ程ト思ヘリ。誠ニ像法轉ズル時。醫主善逝ノ化
現歟又轉法輪堂釋迦如來ノ説法カトアヤマタル。座主ハ
高座ヨリ下給ヒ。正面ノ左ノ柱ノ本ニ座シ給ヘリ。法皇御
感ノ餘ニ。玉御簾褰テ。汝ハ坐道場之德用ヲ備タリ。朕ハ
解脱分之善根ヲ植タリ。汝毎聽説法隨喜思ヒ骨ニ徹シ。
信心身ノ毛竪テ。落涙ハ誠ニコト二難押ト有勅定。當座ノ叡嘆
山門ノ眉目也。御布施ニハ。千石千貫沙金千兩其外被
物裏物。庭上岡ヲナセルガ如シ。實御善根ノ志ハ。施物ニ色

顯レタリ。及夜陰道師退出ス。爲餝佛庭爲照聽衆。萬燈ヲ
炬サレタリ。偖モ彼寺ノ異名ヲハ。平愈寺ト申也。導師祈願
ノ句ニ。衆病悉除身心安樂ト高ラカニ唱ヘ給タリケルガ其
聲洛中白川ニ響ケリ。齋宮ノ女御。折節怪キ瘡ヲイタハラ
セ給ケルガ。御限ト奉見ケルニ。衆病悉除。風ニ聞召テ。則御
平愈其外一時ノ内ニ。邊土洛陽ニ。上下男女。二萬三千
人ノ病愈ヒリケルニ依テ也。異説ニハ。二ノ宮地主權現ノ非
人ト現シ。日光月光。十二神將ノ相具シ説法ト云事アリ。
僻事ニテ。アリケル歟

五節夜闇打。付五節始。并周成王臣下事

加様ニ忠盛。佛智ニ叶程ノ寺ヲ造進レタリケレバ。禪定法
皇感ニ堪サセ給ハズ。被下遷任之上。當座ニ刑部卿二

ナサル。内ノ被免昇殿。昇殿ハ是象外ノ選ナレバ。俗骨望事
ナシ。就中先祖高見王ヨリ其跡久々絶タリシ。忠盛三十六
ニシテ被免ケリ。院ノ殿上スラ難シ上。況内ノ昇殿ニ於テヲ。當
時ノ面目。子孫ノ繁昌ト覺タリ。法皇常ノ仰ニハ。忠盛ナカラ
マシカバ。誰カ朕ヲハ佛ニ成ベキトテ。或時ハ御劔御衣。或時
ハ沙金錦紵ヲ。德長壽院ヘ可奉廻向トテ。下賜ヒケリ。其上
關國ノアレカシ。庄園ノアナカシ。重々モタバント思召レケ
レハ。雲ノ上人朝憤テ。同年十一月ノ五節。二十三日ノ豐
明節會ノ夜。闇打ニセントス度アリ。忠盛此事風聞テ。我
右筆ノ身ニ非。武勇ノ家ニ生テ。今此恥ニアハン事爲身爲
家。心ウカルベシ。又此事ヲ聞ナガラ。出仕ヲ留ンモ。云甲斐ナ
シ。所詮身ヲ全ノ君ニ仕ルハ。忠臣ノ法ト云事アリト云テ。内
内有用意。爰ニ忠盛朝臣ノ郎等ニ。進三郎大夫季房子。
左兵衛尉平家貞ト云者アリ。本ハ忠盛ノ父正盛ノ一門
タリシガ。正盛ノ時始テ郎等職ト成タリシ。木工右馬允平
貞光ガ孫也。備前守ノ許ニ參テ申ナルハ。今夜五節ノ御出
仕ニハ。傾事イデクベキ由承候。但祖父貞光ハ。恐御一門
ノ末ニテ侍リケルガ。故入道殿ノ御時ニ。始テ郎等ニ罷成候
ケリト承。貞光ニハ孫也。季房ニハ子也。親祖父ニ勝ルベキナ
ラヲガ其振舞ヲ仕ル。殿中ノ人々。我モ〳〵ト思輩ハカズ多コ
リ侍ラメドモ。加樣ノ實ノ詮ニアヒ奉ラン者ハ。類少コリ候ラメ。
御供ニハ家貞參ベシ。無御憚可有御出仕ト申ナレバ。忠
盛然ベシトテ召具ス。家貞ハ布衣下ニ。萌黃ノ腹卷。衛府
ノ太刀佩。烏帽子引入袖纈テ。殿上ノ小庭ニアリ。子息平

六家長ハ歳十七。長高骨太ノ剛者。コレモ布衣下ニ。紫威ノ腹巻著テ。赤銅造ノ太刀佩テ。無官ナレバ徐々トノ。左右ノ手ヲ上ニツキテ。犬居ニ居テ。雲透ニ殿上ノ方ヲ伺見テ。兎ノ家貞アヽトイハバ。子息ノ家長モット可打入。支度也。殿上ノ人々怪ヲナシケレバ。頭左中辨師俊。蔵人判官平時信ヲ召テ。宇津保柱ヨリ内ニ。布衣ノ者。候ヌルハ。何者ゾ事ノ體。狼藉也。罷出ヨトイハセタリケレバ。家貞ハ主君備前守。今夜闇打ニセラルベキ由。聞ケリ。果給ハン様。奉見ベケレバトテ。畏ッテ候ケレバ。事ノ様ヲ。賞ニ主コトニアハヾ。堂上マデモ可切上。頬魂ナリケル上ニ。忠盛朝臣。黒鞘巻ヲ。裝束ノ上ニ。横タヘ指ノ支度。計ナキ體ニテ。腰ノ程ヲ差。帯スル様ニメ。柄ヲ人ニゾ見セケル。人々事カラ

尤ルトヤ被思合ケン。其夜ノ闇打ハナカリケリ。昔漢高祖沛公タリシ時。項羽ト雍丘ト云所ニテ。秦ノ軍ト合戦ス。沛公ノ兵。諸侯ニ先立テ。覇上ニ至ル。秦ノ王。子嬰。皇帝璽符ヲ捧テ降入ニ。参ル。諸將コレヲ殺サントヲ。沛公降人ヲ殺事。不祥ナリトテ。吏ニ預ラル。咸陽宮ニ入テ。暫休トシ給ケルヲ。樊噲張良諫申ケレハ。秦ノ寶物。タル庫共ヲ封メ。覇上ニ歸給ケリ。秦ノ父老ノ昔法ノ政ニ。苦メルヲ召集テ宣ケルハ。吾諸侯ト約束ノ。先ニ關ニ入ン者ヲ。王トセントヲ云キ。我既ニ先ニ入。王タルベシトテ。父老ト三章ノ法ヲ約シ給ケリ。人ヲ殺セラン者ヲバ死セシメン。人ヲ破リ及盗セラン者ヲバ。罪ニイタサン。此外ハ秦ノ法ヲ除テ。捨ヨト宣ケル。十一月ニ。項羽諸侯ノ兵ヲ引。關ニ入テ。王トスル守。關ノ兵アリテ入事ヲ得ス。又沛公

咸陽宮ヲ破テ。其威ヲ施スト聞テ。項羽大ニ怒テ關ヲ擊。遂ニ戲ト云所ニ至リヌ。沛公カ臣。曹無傷ト云者。項羽ニ申言シケレバ。項羽彌憤テ。沛公ヲウタントス。爰ニ項羽一家ニ。項伯ト云者沛公ニ志アリケレバ。失ナキ由ヲ述テ。殺事不義也ト諫ケレバ。其事暫思止ニケリ。サテ沛公鴻門ニ行テ。項羽ニ對面シテ。詩心ナキ由。慇懃ニ謝シケレバ。項羽云。是ハ沛公ガ左司馬曹無傷ガ告タル也。サラデハ爭カ知ベキ。宜トヾマリ給ヘ。酒スヽメントテ留置ケリ。彼ノ坐ノ爲體項伯ハ東ニ對テ居リ。亞父ハ南ニ向テアリ。亞父トハ項羽ガ憑タル兵也。沛公ハ北ニ向ヒ。張良ハ西ニ向テヲ居タリケル。亞父玉玦ヲモタゲテ。項羽ニ目クバせ。是沛公ヲ討トノ心也。加様ニ三度マデスレドモ。大方不心得不思寄

亞父座ヲ起テ。項莊ヲ招テ云。項羽人ノ謀ニ隨ズ。汝沛公ヲ亡テナス樣ニテ。劍ヲ拔テ舞近付テ頸ヲ切ン。然ラズンバ我等還テ彼ガ攻ヲ可蒙ト云ケレバ。項莊替リ入テ亞父ガ教ノマヽニ。左ノ手ニ劍ヲ提テ舞テハ沛公ニ近ヅキケリ。項伯沛公ヲ空ク伐事哀ミテ。劍ヲ拔テ共ニ舞。項莊カ近ヅク時必沛公ヲ立隱レケリ。張良此事ヲ淺猿見テ。坐ヲ立テ樊噲ニ語ル。樊噲大ニ驚テ。門ヲ入ニ。守門ノ兵禦ヲケレバ。楯ヲ先立テ破入ヌ。幕ヲ褰テ西ニ向テ立リ。大ニ嗔テ項羽ヲ見テ。頭ノ髮筋立上。眼廣クサケタリ。項羽恐テ劍ヲ取テ跪キ。何者ゾト問ケレバ。張良カ云。沛公ガ臣樊噲也ト名ケリ。サラバ酒勸ヨトテ。一斗ヲ入ル盃ニテ與タレバ。樊噲悅色ニテ事トモせズ呑テケリ。彘ノ肩ヲ肴ニ出タリケルヲバ。楯ノ上ニテ太刀

ヲ拔テ切テ食ス。猶モ飲テンヤト項羽云ケレハ。命ヲ失フ共
爭カ辭シ申ベキ。況一斗ノ酒物ノ數ニ侍ラバトテ。眦長裂テ
瞋立ル。頬魂イブセク思ハレケルニヤ。沛公幸ユヘナク道レニ
ケリ。忠盛朝臣モ。此郎等ヒヘニ其夜ノ恥辱ヲ道ケリ。縫
殿陣。黒戸ノ御所ノ邊ニテ。怪人コヲ遇タリケレ。忠盛見咎
テ物ヲバイバズ。一尺三寸ノ鞘巻ヲ拔手ノ内ニ耀様ナルヲ。
鬢ノ髮ニスハリ〳〵ト搔撫テ。良アリテ哀是ヲ以テ。狼藉結搆
スル惡キ者ニ。一當ハヤナト云ケレバ。アヤシミタル人則倒
伏ニケリ。勘解由小路中納言經房卿。其時ハ頭辨ニテ扶
節通合給ヘリ。花ヤカニ裝束シタル者。ウツブシ伏タリケル間
誰人ゾトテ引起給タレバ。ワナ〳〵弱々シキ聲ニテ。忠盛
ガ刀ヲ拔テ。我ヲキラントシツルガ身ニハ負タル疵ハナケレ共。

臆病ノ自火ニ攻ラレテ絶入タリケルニヤト宣ヘバ。經房卿ハ
アナ物弱ヤ。實ニ闇打ノ張本トモ不覺トテ。見給タレバ中宮
亮秀成ニテゾ御座ケル。理ヤ此ノ人元來臆病ノ人ノ未成ケリ。
父秀俊卿ハ中納言ニテ。歳四十二ト申シ時。夢想ニ侵
サレテ死給ヘル人ノ子ナレバニヤ。係ル目ニアヒ給フコソオ
カシケレ。抑五節ト申ハ。昔清見原帝御宇ニ。唐土ノ御門
ヨリ。崑崙山ノ玉ヲ五ツ進給ヘリ。其玉暗ヲ照事。一玉ノ光
遠五十兩ノ車ニ至ル。是ヲ豐明ト名付タリ。御秘藏ノ玉
ニテ。人是ヲ見事ナシ。天ヒシ天皇芳野河ニ御幸ノ。御心ヲ
澄シ。琴ヲ彈給シニ。神女空ヨリ降下リ。清見原ノ庭ニテ。
廻雪ノ袖ヲ飜ケレドモ。天暗ノ見エザリケレバ。彼玉ヲ出サレ
仙女ノ形ヲ御覽ジキ。玉ノ光ニ耀テ

乙女コカ乙女サヒスモカラ玉ヲ。乙女サヒスモ其カラ玉ヲ
ト。五聲歌ヒツヽ。五タビ袖ヲ翻ス五人ノ仙女舞事各異
節也。サテコヽノ五節ト名付タレ。彼舞ノ手ノ摸ツヽ。雲ノ上人
舞トカヤ。其時拍子ニハ。厚薄様厚染紫ノ紙。巻上ノ糸。鞆
繪書タル筆ノ軸ヤト。ハヤヌ也。仙女ノ衣ノ薄透通リテ。巖キ
有様ガ薄様ト。厚染紫ノ紙ニ。相似タリ。舞ノ袖ノ翻。簪ヨリ
上方ニ。巻上タル貌。絲ヲ以テ巻タルカ如ク。鞆繪ノ書タル筆
ノ軸ヲ。差上タル様ナレハ。昔ヨリ五節宴醉ノ肩脱ニハ。必カ
クハヤスヲ。御前ノ召ニ依テ。忠盛ノ舞ケル時ニ。サハナクテ。俄
ニ拍子ヲ替テ。伊勢平氏ハ耿ナリケリト。ハヤシタリケリ。目ノ
スガミタリケレバ。取成ハヤサレケル。最興アリテヅ聞エシ。忠盛
身ノカタワヲ謂レテ。安カラズ思ヘ共。無為方著座ノ始ヨリ。

殊ニ大ナル黒鞘巻ヲ隠タル氣モナク。指ホコラカシタリケルガ
亂舞ノ時モ猶サレタリケリ。未御遊モ終ラザルニ退出ノ次
ニ。火ノホノ暗キ景ニ。オホ刀ヲ接出シ。髻ニスハリ〳〵引當
ケレバ。火ノ光ニ耀合テ。キラメキケレバ。殿上ノ人人皆見ヒ
忠盛如此シテ出様ニ。紫震殿ノ後ロニ。主殿司ヲ招寄。
腰刀ヲ鞘ナガラ接。後ニ必尋アルベシ。慥ニ預ケントテ出ニケ
リ。家貞主ヲ待受テ。如何ニト申ケレバ。有ノ儘ニ語ラバ僻事
スベキ者ナレバ。別ノ事ナレトリ答ケル。五節以後公卿殿上
人一同ニ訴申サレケルハ。忠盛サコソ動代ノ弓矢取ナラ
ンカラニ。加様ノ雲上ノ交ニ殿上人タル者。腰刀ヲ差顯ス
條。傍若無人ノ振舞也。雄劔ヲ帯ノ公庭ニ座列シ。兵杖ヲ
賜テ宮中ヲ出入スル事。格式ノ禮ヲ定タリ。而ヲ忠盛或

相傳ノ郎等ト號シ布衣ノ兵ヲ殿上ノ小庭ニ召置。或其身腰ノ刀ヲ横タヘ差テ餘會ノ座ニ列ル希代ノ狼藉也。早御札ヲ削テ可被解官停任由被申々リ。上皇ハ群臣ノ列訴ニ驚思召テ。忠盛ヲ召テ有御尋。陣ヒ申ケルハ。郎從小庭ニ伺候ノ事不存知仕。但近日人々子細ヲ被相構依有其聞。年來ノ家人爲助其難。忠盛ニ知セズシテ推參スル罪科可有聖斷。次ニ刀ノ事。主殿司ニ預置。候被召出依實否。各ノ御左右アルベキ歟ト奏シケレバ。誠ニ有其謂トテ。件ノ刀ヲ召出シ。及覽上ハ。黒漆ノ鞘卷。中ハ木刀ニ銀薄ヲ押タリ。爲道當座之恥。横タヘ差タレ共。恐後日之訴。木刀ヲ構タリ。用意之體神妙也。郎從小庭ノ推參。武士ノ郎等ノ習歟。無存知之由申上ハ。忠盛ガ各ニアラズト。還テ預

敵感ケリ。昔周成王ノ忠臣ニ召リウド云兵アリ。依勸賞位至蒸相。早思太臣ト云。代ヲ治テ人ヲ憐事頗君王ノ如ナリケレハ。御氣色超世。恩賞傍輩ニ過タリ。羣臣妬之亡サント思ヘ共猛人ニテ折ヲ得ス。臣下内議。皇居ニ古文ト云御遊ヲ始テ。其中ニ闇打ニセント支度ス。彼大臣ノ武具ヲ制セン カタメニ。衛府ノ太刀ヲ禁斷ス。早思先立テ存知シケレバ。我身并ニ相從輩ニ木劔ヲ持レメ。殿上ニ交ル。大臣ノ氣色アタリヲ拂テ嘆レル有様ナリケレハ。存知シニケリトテ。其夜ノ亂ヲ止メケリ。雲客後日ニ參内。當座一同ノ面與議。綸言非違背哉殿上ニ用ヌ雄劔ヲ帶メ。大家ノ黨ニ交條。例ヲ亂ル處也。尤罪科重シ。早ク罪セラルベキヲヤト訴申ケレバ。君驚思食テ。早思大臣ニ御尋アリ。大臣陣ノ言

二申サン。雲客腰ニ太刀ヲ付。忠臣手ニ雄剣ヲ提ル。是國ヲ鎮奉守ル君ノ處也。何ゾ清君ノ裥ニ文ノ節會ヲ立ナガラ。劔ヲ可被誡哉。然而與一同之僉議ノ刀ヲ止トイヘ共。忠臣ハ大内ヲ勝ント謀ヲ廻ノ木ノ劔ヲ構タリトテ件ノ劔ヲ召寄テ。及覧ケリ。君大ニ御感アリテ。實ニ帝ヲ勝ル忠臣ナリトテ。不及罪科。沙汰。斯リケレバ天下悉重レ。雲客皆靡テ。偏執ノ思オタレクシ。賢臣ノ與ヲ仰ケルトカヤ。異國本朝上古末代異ナレ共。事カラ實ニ相同シ。忠盛此事ヲ摸レテ加様ニ思寄ケルニヤト。嘆ヌ人コソナカリケレ

兼家。季仲。基高。家繼。忠雅等指子。什忠盛卒事

忠盛ハ。桓武天皇ノ御苗裔。葛原親王ノ後胤トハ申ナカラ。中比ハ無下ニ打下テ官途モ淺ク近來ヨリ都ノ住居モ疎々敷。常ハ伊賀伊勢ニノミ居住セシ人ナレバ。此一門ヲハ伊勢平氏ト申ケルニ依テ。彼國ノ器ニ准テ。忠盛右ノ目ノ眇タリケレバ。伊勢平氏ハスガメ成ケリトハ。指子ケルニコソ。或人ノ申ケルハ。忠盛心憂クモハヤサレツル者哉。如何計口惜カリケン。其答ヲハ如何ニセザリケルヤラン。痛ク心オクレセヌ。男トコリ出ニ知タルニト申ケレバ。又或人ノ語ケルハ。昔モ係ル多メシナキニ非。村上帝ノ御宇。左中將兼家ト云人アリ。北方ヲ三人持タレバ。異名ニハ。三妻錐ト申ケリ。或時此三人ノ北方一所ニ寄合テ。姤色ノ顯レテ。打合取合髪カナクリ。衣引破リナントシ。思苦カリケレハ。中將ハ穴六借トテ。宿所ヲ捨テ出給ヌ取サフル者モナクテ。二三日マテ組合テ息ツキ居タリ。二人ノ打合ハ常ノ事也マシテ。三人

ナレハ。誰ヲ敵共ナク。向フヲ敵ト打合ケルコソ哭シケレ。是モ五節ニ拍子ヲカヘテ。取障ル人ナキ宿ニハ。三妻雖コソ揉合ナレ。穴廣々ヒロキ穴カナトハヤシケリ。太宰權帥季仲卿ハ。餘ニ色ノ黑カリケレバ。人黑帥トゾ申ケル。藏人頭ナリケル時ソレモ穴黑々黑キ頭哉。如何ナル人ノ漆塗ラント。拍子々リケレバ。季仲卿ニ並テ御座ケル。基高卿ノ舞シケルニ。此人餘ニ色ノ白カリケレバ。季仲卿ノ方人ト覽シクテ。穴白々白キ頭哉如何ナル人ノ薄押ナント。拍シ返シケル。殿上人モオハシケリ。右中將家繼ト云人。祖父ノ代マデハ時メキタリケルガ。父ガ時ヨリ氏タエテ有カ無カニテ御座ケルカト下臈徳人ノ聟ニ成テ。舅ノ徳ニ右ノ中將ニ成給タリケリ。此モ五節ニ絶ヌル父ニ及バス。祖父ノ代マデハ家繼リカシ左曲ノ

右中將ト拍子タル。貪キ者タノシキ妻ヲマウクルハ。左ユカミト云事ナレバ。舞拍子ケル也。花山院入道太政大臣忠雅ノ。十歳ニテ父中納言忠宗卿ニ後シ給ヒ。孤子ニテオハセシヲ。中御門中納言家成卿ノ。播磨守ノ時聟ニ取テ。花ヤカニモテナサレケレハ。是モ五節ニ播磨米ノ木賊カ。椋ノ葉カ人ノ鉛ヲ付ルハトリ拍子タリケル。上代ハ角コリ有シカ共異ナル事ナシ。末代ハ如何アルベキト人ノ心覽東ナシ。忠盛朝臣子息アマタ有キ。嫡子清盛。二男經盛。三男教盛。四男家盛。五男頼盛。六男忠重。七男忠度。以上七人皆諸衛佐ヲ經テ。殿上ノ交リ人更ニ嫌ニ及バズ。日本國ニハ男子七人アルヲバ長者ト申事ナレバ。人多ク羨ケリ。是モ德長壽院ノ御利生ト覽タリ。但命ハ限アル事ナレバ。近衛院御

宇仁平三年癸酉正月十五日。行年五十八ニテ卒シケリ。猶モ盛トコソ見エシニ。春立霞ニタグヒ。雲井ノ煙ト消上リ。指タル病モナシイツモ正月十五日。精進潔齋シケルガ。今年モ又身心ヲ清メ沐浴シテ。本尊ノ御前ニ香ヲ焼花ヲ供シテ。念佛申西ニ向テ。睡ガ如ノ引入ニケリ。今生ニハ一千一體ノ觀音ノ利益ヲ蒙。四海ニ榮花ヲ開。終焉ニハ上品中品ノ彌陀ノ來迎ニ預ツテ。九品ノ蓮臺ニ生。見人聞人モ不敬ト云事ナシ。女子五人。男子七人有キ清盛嫡男ナレバ。其跡ヲ繼。諸國庄園ヲ讓ルノミニ非。家中ノ重寶同相傳シテ。他家ニ移事ナシ中ニモ唐皮ト云鎧。小烏ト云太刀清盛ニ被授又拔丸モ此家ニ止マルベカリケルヲ。頼盛當腹ノ嫡子ニテ傳之。コノ事ニ依テ。兄弟中惡カリケルトゾ聞エシ。

清盛行大威德法付行院天并清水寺詣事

抑清盛打續繁昌シ給ケル事。幼少ノ昔中御門家成卿ノ許ニ。局ズミノ有ケルニ。彼卿ノ祈ノ師ニ。太納言阿闍梨祐眞トテ。貴キ眞言師アリ。家成卿ノ持佛堂ニ。護身加持ノオハシケレバ。清盛モ常ニ有參面。間給ケル事ハ眞言上乘ノ祕法ノ中ニ。何ナル法カカ樣ノ在家ノ者ノ奉行。猶爲ノ頼利生事候ト被申タリケレバ。阿闍梨答云信心至テ修行スレバ。何ナル法モ可成就。但摂威於一天。抽德於萬人。若五大明王ノ其一大威德ノ法コソ成就アレバ必不子ノ位ニ昇トハ申タレト云ケレバ。則阿闍梨ヲ師匠ト憑テ。件ノ法ヲ傳受。七箇年ノ間一向清淨ニ齊戒シテ。可鄙ガ滋味ヲモ斷シ。玄石ガ美キ酒ヲモ禁ジ。勇猛精進シ。信心

勤行シ給ケリ。七箇年ニ蕭タル夜道場ノ上ニ聲アリテ云
ツトメント思フ心ノキヨモリハ。花ハ咲ツヽ果モサカヘン
ト。清盛後憑モシク思テ。彌致精誠。祈念シケレ共。餘ノ貪者
ナリケレハ。倩案ズ思ヒケルハ。我諸國庄園ノ主也。縱ヒ何トナ
ケレ共。生得ノ報トテ。身一ツ助ル分ハ有ヾカシ。況清盛カ身
ニ於テヲヤ。希代ノ果報哉ト怪處ニ。或時蓮臺野ニ大ナ
ル狐ヲ追出シ。弓手ニ相付テ。既ニ射ントシケルニ。狐忽ニ黄
女ニ變ジ。莞爾ト笑ヒ立向テヤヽ我命ヲ助給ハヾ。汝カ所
望ヲ叶ヘント云ケレバ。清盛矢ヲハヅシ如何ナル人ニテオハ
スゾト問フ。女答テ云。我ハ七十四道中ノ王ニテ有ゾト聞コヱサ
テハ貴狐天王ニテ御座ニヤトテ。馬ヨリ下テ敬屈スレハ。女又
本ノ狐ト成テ。コウ〳〵鳴テ失ヌ。清盛案ジケルハ。我財寶ニウ

ヘタル事ハ。荒神ノ所爲ニゾ。荒神ヲ鎮テ財寶ヲ得ニハ。辨才
妙音ニハ正如。今ノ貴狐天王ハ。妙音ノ其一ツ也。サテハ我
隆天ノ法ヲ成就スベキ者ニコソトテ。彼法ヲ行ケル程ニ。又
返レテ案ジケルハ。實ヤ外法成就ノ者ハ。子孫ニ不傳ト云者
ヲイカヽ有ベキト被思ケルカ。ヨシ〳〵當時ノコトク。貧者ニテ
ナカラヘンヨリハ。一時ニ富テ各ヲ揚ニハトテ被行ケレ共。道
カ後イブセク思テ。兼テ清水寺ノ觀音ヲ奉憑。蒙御利生。
千日詣ヲ始タリ。雨ノ降ニモ。風ノ吹ニモ日ヲ闕ズ千日既ニ
滿ジケル夜ハ通夜シタリ夜半計ニ兩眼拔テ。中ニ廻テ失
ヌト夢ヲ見ル。覺テ後淺猿ト思テ。實ヤ佛神ハ來ラサル果
報ヲ願ヘバ。還テ災ヲ與ヘ給トイヘリ。アハレ是ハ分ナラヌ幸
ヲ願ニ依テ。觀音ノ罰ニ我魂ヲ拔給カ。見エヌルヤラント魂

心モナシ。去ニテモ人ニ尋ントテ。我眼ノ拔テ。中ニ廻テ去ヌル ト。夢ニ見タルハ善歟惡歟ト札ニ書テ。清水寺ノ太門ニ立テ。人ヲ付テ令聞之。參リ下向ノ人多ク札ヲ見テ。不心得ト而已云テ。誰モ善惡ヲバイハス。兩三日ヲ經テ後ニ。或人見之打ウナヅキテ。實ニ目出キ夢也。吉事ヲバ目出シト云。目出シトハ目出ルト書リ。眼ノ拔ハ目ノ出ル也。此夢主ハ。日來心苦ク侘シキ事ヲノミ見ケルカ。此觀音ニ依奉歸依難ノ眼ヲ脫棄給テ。吉事ヲ見ンスル新キ眼ヲ。可入替給御利生ニヤ。アツハシ夢ヤ〳〵。兩三度嘆テ去ヌ。使歸テ。能ト申ケレバ。清盛大ニ悅テ。サテハ好相成ケリトテ。彼札ヲ深リ納テ。仰天果報ヲ俟ツ

清盛捕化鳥并一族官位昇進付禿童并王莽事

去程ニ夢見テ。廿日ト申夜ハ。內裏ニ伺候シタリケリ。夜半計ニ及テ。南殿ニ鵺ノ音シテ。一ツ鳥ヒメキ渡タリ。藤持秀方。折節番ニテオハシケルガ。殿上ヨリ高聲ニ。人ヤ候ト被召ケリ。左衛門佐ニテ。間近候ケレバ。清盛ト答。南殿ニ朝敵アリ。罷出テ搦ヨト仰ス。清盛コハイカニ。目ニ見ル者成トモ。飛行自在ニテ。天ヲ翔ラン者ヲバ。爭カ取ベキ。況暗サハイ體モ見エス。音計アラン者ヲ。能トレト仰出サルヽ事ノ淺猿サヨ。如何ガハセント思ケルカ。急度思直テ實ヤ綸言ト號セバヤ樣アル事也。天竺ニハ號勅定。獅子ヲ取。大臣モアリ。漢家ニハ宣旨ノ使ト名乘テ。荒タル虎ヲトル者モ有ケリ。我朝ニハ任ニ啟慮雲ニ響雷ヲ取。臣下モ有ケリ。延喜御宇ニハ池ノ汀ノ鷺ヲ取タル藏人モアリ。末代トイヘ共。日月地ニ墜

給ハス。手例ヲ追ザルベキ取テ進セバヤト思ケレバ。畏テトテ音ニ付テ踊懸ル處ニ。此鳥騒テ左衛門佐ノ左ノ袖ノ内ニ飛入。則取テ進セタリ。叡覧アレバ實ニ小キ鳥也。何鳥ト云事ヲ不知食。癖物ナリトテ有御評定。ヨクク見レハ毛シレウ也。毛シレウトハ鼠ノ唐名也。加様ノ者マテモ。皇居ニ懸念ヲナシケルニ。中博士召セトテ召レタリ。占申ケルハ。此事漢家本朝ニ希也。但垂仁天皇三年二月二日。毛シレウ皇居ニ其變ヲナス。武者所蒙御トラルトレケルニ。不取得ノ門外ニ飛出ヌ。此故ニ七年ノ大疫癘。七年ノ大飢饉。七年ノ大兵亂ナリケレバ。廿一年ノ間。上下萬人其愁不絶。而ルヲ清盛綸言ノ下ニ。朝威ヲ重ノ怪鳥ヲ取事ヲ得タリ。尤吉事ニ候。天下十六箇年ノ間。風雨時ニ隨ヒ。寒暑オリヲ不

可慎ト奏シ申ケレバ。偖ハ希代ノ吉相ニヤトテ。南臺ノ竹ノ召。中ニ籠テ清水寺ノ巽ニ埋レタリ。御悩ノ時ニ勅使立テ被宣命。時毛シレウ竹カ塚ト云ハ是也。公卿有衆議。天下安穏ニ萬民愁ヲ休メシニハ。怪異ヲ鎮テ進スルニハ不如。コレ非朝敵。鎮ヲ勸賞アルベシトテ。安藝守ニナサル。是清水寺ノ夢想ノ驗也。鼠ハ大黒天神ノ仕者也。此人ノ榮花ノ先表タリ。威勢ハ大威德天。福分ハ辯才妙音陀天ノ御利生也。サレバ清盛安藝守ト申シ時。保元々年。左大臣謀叛ノ時。コトナル賞アリテ。同年七月十一日。安藝守ヨリ播磨守ニ移リ。同八月十日。任太宰大貳。平治元年信頼卿謀叛之時。勲功アリテ。同年十二月廿七日ニ。經盛伊賀守。頼盛尾張守。宗盛遠江守。重盛伊豫守。教盛越

中守基盛任左衛門佐。永暦元年ニ。正三位シテ。拜
議同二年。右衛門ノ督。換非違使別當。權中納言ニ任ス。
長寛三年ニ。權大納言ニ至リ。仁安元年。任内大臣兼。官
首井饗祿ナカリケレ共。忠義公ノ例トリ聞エシ。同二年ニ太
政大臣ニ上ル。左右ヲ經スメ。此位ニ至ル事。九條大相國信
長公ノ外。摠ノ先蹤ナシ。大將ニアラズ共。兵杖ヲ賜テ隨身
ヲ召具シテ。執政ノ人ノ如シ。輦車ニ乘テ。宮中ヲ出入ス。偏
ニ女御入内ノ儀式也。太政大臣ハ。訓導之禮重ク儀形之
寄深ケレバ。地勢大トイヘ共。賢慮不足者。無ル當其任。雖
天才高。政理不明者。猶非其器。非其人。讓ベキ官ニアラ
サレドモ。下天ノ安危。由レ身萬機ノ理亂。在掌ケレバ。不及子
細。親子兄弟。大國ヲ賜リ。兼官重職ニ任ジケル上。三品ノ
階級ニ至ルマデ。九代ノ先蹤ヲ越。榮ケルヲユヽシキ事ト
思シ程ニ清盛仁安三年十一月十一日。歳五十一ニテ
重病ニ侵サレ。爲存命仍ニ出家入道ス。法名ハ静海ナリ
其驗ニヤ宿病立ドコロニ愈テ。天命ヲ全ス。人ノ從ヒ付事
ハ。吹風ノ草木ヲ靡スガ如ク。世ノ偏ク仰ク事ハ。唐ノ國
土ヲ潤ニ異ナラズ。サレバ六波羅殿ノ御一家ノ公達ト云テ
ケレハ。花族モ英才モ。面ヲ向ヘ肩ヲ並ル人ナカリケリ。太政
入道ノ小舅ニ平大納言時忠卿ノ常ノ言ニ。此一門ニアラ
ヌ者ハ男モ女モ尼法師モ。人非人トリ被申ケル。斯リケレハ。
如何ナル人モ。相構テ其一門其ユカリニムスホヽレントゾシ
ケル。昔呉王好劍客。百姓多瘢瘡。楚王好細腰。宮中
多餓死。城中好廣眉。四方且半額。城中好大袖。四

方用足帽ト云事アリ。サレバ烏帽子ノタメヤウ。衣紋ノカヽリヨリ。始テ何事モ。六波羅様ト云テケレバ。天下ノ人皆學レ之隨レ之ケリ。如何ナル賢王聖主ノ御政ヲモ。攝政關白ノ成敗ナレドモ何トナク世ニアヽサレタル徒者ナントゝ。謗リ傾ケ申事ハ常ノ習ゾカシ。サレドモ此入道ノ世ノ間ハ。聊モ忽緒ニ申者ナカリケリ。其故ハ入道ノ計ヒニテ十四五若ハ十六七計ナル。童部ノ髪ヲ頸ノ廻ニ切ツヽ。三百人被召仕ケリ。童ニモアラズ。法師ニモアラズ。ユハ何者ノ貌ヤラン。一色ニ長絹ノ直垂ヲ著ル時ハ。褐ノ布袴ヲキセ。一色ニ繡物ノ直垂ヲ著時ハ。赤袴ヲキセ。梅ノ桙ノ三尺計ナルヲ。手モト白ク沈テ右ニ持。鳥ヲ一羽ツヽ鈴付ノ羽ニ。赤符ヲ付テ。左ノ手ニスヘサセテ。面々ニモタセテ明テモ暮テモ遊行セレム。是ハ靈烏頭ノミサキ者トテ。大會宴ノ珠童ヲ學レタリ。又ハ耳聞也。モシ浄海ガアタリニ意趣アラバ。忽緒ニ云者アルベシ。其者ヲバ聞出シ申モ上ヨ。相尋ントノ給ケレバ。京中ノ條里小路。門門戸々ヘ耳ヲ峙思モ思ハヌモ。其アタリノ事ヲ云ヲバ聞出シ申ケレバ。各ナキアタリヲモ多損シケリ。最沙クゾ在ケル。不祥ト思也。入道殿ノ禿ト云ケレバ。京中ニハ又モナキ高家ノ者也。九重白川ノ在家人多ク大事ヲメ。子孫ヲ禿ニ入ケレハ。三百人洛中ニ充滿タリ。世ヲ趨ル馬牛車。宜輿車モ道ヲヨキテゾ通リケル。適路次ニ逢輩ハ。御幸行幸ニ參會タル樣ニテ。手ヲツキ腰ヲカヾメ走ノキテゾ過行ケル。禿カ申事ヲバ善惡ヲ糺サズ。入道許容シ給ケレハ。上下萬人是ニ追從シ。善モ惡モ平家ノ事ヲバ云。又禿ニ惡シト思ハレタ

ル者ハ入道殿ニ讒言ラレテ各ナクレテ多ク損スル者モ有ケリ。オヲ〳〵モ内大ハ此禿ノ體コソ心得ヲ。縱京中ノ耳聞ノ爲成ト雖モ只普通ノ童ニテアレカシ。必シモ汰ヘラルヽ事ヨ。又一人モ關レハ。入立テヽ三百人ヲ。キハメラルヽモ不審也。梅ノ搭鳥ノモチ樣。何樣ニモ存スル子細オハスラン。昔モ是風情ノ例ヤ有ラントソ私語ケル。或人ノ申ケルハ。本朝ニ例ナシ。漢家ニハ葉太臣ト云ケル人。天下無雙ノ賢臣ニテ忠ヲ賞シ。罪ヲ懲ル事。堯舜ノ政化ニモ不異。依之今ノ如ク禿童ヲ多ソロヘテ。金歸鳥ト云鳥ヲ持セテ。國々巷々ニ放立テ仰含テ云。國廣民多ク萬人ノ愁歎難及天聽歟。闇出ス隨テ奏セヨ直ニ召行ハント有ケレハ。愁ヲ殘ス者モナク。恨ヲ含者モナシ。國豐民政德海内ニ及ホシケリ。サレハ是ヲハ。善者ノ童ト名付トイヘリ。今ノ禿童ハ事ニ觸テ歎キ。物ノ煩アリケレハ。惡者ノ童ト云ツベシ。漢家本朝。上古末代。善惡ニハ替レ共。權威ハ實ニ不劣ヲ有ケル。入道福原ニ御座ケル時ハ。賀茂大明神禿ニ現シ。三百人ニ打下ギレテ。御近習ニ有ケリ。何レ今ノ童ヤラン。本ノ禿ヤラン。恐レカリケル事也。又九條殿ノ御物語トテ。人ノ語ケルハ。異國ニモサル例アリケリ。漢孝平帝ノ代ニ王莽ト云大臣アリ。位ヲ貪ラン爲ニ。計ヲ廻ス事ハ。海人ニ誂テ。幾千萬トモイハス。龜ヲ捕集テ。甲ノ上ニ勝ト云文字ヲ書テ。浦々ニ放チ。銅ニテ馬ト人トヲ造テ。近國ノ作ノヨヲ透ク。多入ル。其後姙テ七月ニナル女子ヲ。三百人召集テ。朱砂ヲ煎ジ。護藥ト云藥ヲ合テ。コレヲ呑レム。月滿テ生タル子皆色赤ク。偏ニ鬼ノ姙シ。彼赤キ

童ヲ人ニ知セズシテ。深山ニ籠テ是ヲワダツ。成長スル間ニ歌ヲ作教テ云。龜ノ甲ノ上ニ勝ト云文字アリ。竹ノヨノ中ニ銅ノ人馬アリ。王莽帝位ヲ繼テ所治天下一驗也ト歌テ。十四五計ノ時。髮ヲ肩ノ廻リニヲキマハシテ。都ヘ出メ三百人拍子ヲ打テ。同音ニ歌ケリ。此景氣ニ驚テ。帝ニ奏聞ス。則彼童ヘヲ南庭ニ召レタリ。ウタフ事如ノ前。孝平帝怪テ。有公卿衆議。歌ノ實否ヲタヾサンガ爲ニ。浦々ノ海人ニ仰テ龜ヲ取見。竹林ニ入テ。人馬ヲ取出ル聊モ歌ニ不違ト。帝位ヲ王莽ニ授給ケリ。天下ヲ治テ。僅ニ三箇年終ニハ亡ニキ。サレバ人道モ此事ヲ表。三百人ヲ召仕。位ヲバ懸テ角ヤ有トヾ語ケル。何樣ニモ名聞ノ至リ興。天狗之所爲ニヤトヾ私語ケル。昔唐ニ弘農ノ楊玄琰カ女ニ。楊貴妃ト云美人アリキ。玄宗皇帝ニ召テ。寵愛類ナカリケル。アマリ叔父昆弟皆清貫ニツラナリ。姉妹國夫人ニ封ス。富王室ニヒトシク。車服太長公主ニ同シカリケレバ。禁門ヲ出入スル時ニ。各姓ヲ不問。京師ノ長吏是カ爲ニ目ヲウバメタリト云事アリ。彼レ久シカラスシテ亡ニキ。是直事ニアラストヾ覺タル。清盛我身ノ榮花ヲキハムルノミニ非。子孫ノ繁昌ハ龍ノ雲ニ昇ルヨリモ速也。男ハ各誇官職。女子ハ取ケニ幸シケル。長男重盛内大臣ノ左大將。二男宗盛中納言ノ右大將。三男知盛。三位中將。嫡孫維盛。四位少將。家門ノ繁昌子孫ノ榮花。類モナク例モナシ。凡一門ノ卿相雲客。諸國ノ受領衛府諸司。趨ノ六十餘人ナリ。百官既ニ半ニ過タリ。世ニハ又人ナシト見タリ。日本ハ是神國也。伊弉諾伊弉冊ノ

御子孫。國ノ政ヲ助給フ。昔天照大神。邪神ヲ惡ミ給テ。天岩戸ニ籠ラセ給タリシカバ。天下悉ク闇ニ。人民悲ミ歎シニ。御弟ノ天兒屋根尊八萬四千ノ神達ヲ相語ヒ。岩戸ノ御前ニ。樣々祈申サセ給タリケレバ。日神再ビ天下ヲ照シ。人民大ニ悅ブ。天照太神。兒屋根尊ニ仰合テ云ク。我子孫ハ此國ノ主トシ。萬人ヲ隣レヽ。汝ガ子孫ハ臣下トシ。國ノ政ヲ助ヨト依有リ。御約束。御裳濯河ノ御流。海内ヲ治メ御座シ春日明神ノ御子孫。朝ノ政ヲ輔給ヘリ。サレハ攝政關白ノ御末ノ外ハ。輔ク官職ヲ諍ベキニアラス。就中天平十二年正月。始テ此ニ參議兵部卿藤原豐成卿。中衛大將ヲ置ル。寶龜四年。大納言中務卿藤原魚九。初テ兼近衛大將。大同二年四月。改近衛府。左近府トシ中衛府ヲ以テ。右近府トセシヨリ以來。兄弟左右ニ相並例。僅ニ四箇度也。文德天皇御宇。齊衡元年ニ。左ニ忠仁公良房冬嗣公。二男西三條右大臣良相公。同五男朱雀院御宇。天慶八年ニ。左ニ清愼公實賴。貞信公一男。右ニ九條右大臣師輔公。同二男後朱雀院御宇。寬德二年左ニ大二條關白教通公。御堂ノ一男。右ニ堀河右大臣頼宗公。同三男二條院御宇。應保元年。左ニ中山關白基房公。法性寺關白一男。右ニ後法性寺關白兼實公。同三男相並給ヘリキ。是皆攝祿ノ臣ノ公達ナリ。凡人ニトリテ無先例。偏ニ官位ヲ重シ。賢オヲ選シ故ナリ。況昔ハ殿上ノ交リヲダニ嫌シ。人ノ子孫ヲカシ。今ハ禁色雜袍ヲユリ。顯職溫官ヲ經テ。父子烝相ノ位ニ至リ。兄弟將相榮ヲ

並タリ。末代トイヘ共不思議ナリシ事共ナリ。政道忽ニ亂レ。
官途コヽニ廢ル、歟。是ハ偏ニ大威德明王ノ御利生ニヤ
ト覺タリ。世ニハ不敵ノ者モ有ケリ。入道ノ宿所六波羅ノ
門前ニ札ヲ書テ立タリケルハ
伊豫讃岐左右ノ大將カキコメテ。欲ノ方ニハ一ノ人哉

源平盛衰記卷第一終

九月二日正月 杉井本ニテ再校了

源平盛衰記卷第二目録

清盛息女事
日向太郎通良懸頸事
基盛打殿下御隨身。付主上上皇除目相違事
二代后。付則天皇后事
新帝御即位。同崩御付郭公。并兩禁獄事
額打論。付山僧燒清水寺。并餝稽山事
清水寺縁起并上皇臨幸六波羅事

源平盛衰記呂巻第二

清盛息女事

御娘八人御座ケルモ。皆取々ニ幸レ給ヘリ。一ハ本ハ櫻町中納言成範卿ノ相具レ給レ程ニ。彼卿下野ヤ室ノ八嶋ヘ被レ流。後花山院左大臣兼雅ノ。御臺盤所ニ成給ヘリ。寶ハ成範卿ト。左太臣家トハ。兄弟ノ契リニテ無内外中ナリケリ。左大臣ノ北方モオハせテ。一二三年男上人ニテ。常ハ心ヲ澄レヨロヅ倦氣ナル有様ナリケレバ。直事ニ非。如何ニモ子細御座ニコソト人皆怪ヲ成ス。大臣或時御乳人ノ三位局ヲ召テ。御物語アリ。去々年ノ春成範ノ女房ヲ。雲上ニテ風見タリレヨリ。心苦思アリ。男ノ習ハ后ヲモ奉レ盗。國ノ騒トモ成ヅカレ。況是ハ左モ右モ謀リ出ノ。思ヒハルベケレ共。

中納言ノ爲ニ。後闇キ事ハ有マレ。兄弟ノ契ナガラ。相思ノ情浅カラズ。縱ヒ我思ノ女ナリトモ。所望セハ慰ベシ。只餘所ナガラ無レ由見ソメケン事コソ。ツラカリケリト思ヘハ。色ニ出テ汝ニサヘ。心苦キ思ヲ付ル事コソ不便ナレナント。徒ノ忍ノ御物語アリ。三位局宿所ニ歸テ。大臣ハ由々シキ大事ノ病ハツキ給ニケリト歎ケリ。此局ノ妹トノ侍從ヲ呼テ。此事ヲ語。侍從申様。其事ニヤ一日中納言殿ノ仰ニ。大臣殿ノ御景氣ハ。如何ニモ人ヲ戀給ト見エタリ。イカナル人ニ思ヲ殘レ給フヤラン。哀成範カ妻ナントナラバ。奉リナン。隔ナク申レ昵ヒ奉ル詮ニハ是コソ實ノ志ナレト被レ仰。カバカリ思ヒ奉ルトハヨモ思給ハレト。御心苦氣ニ候シヲ參テ申テミントテ。立歸リツヽ中納言ニ私語申タレバ。打咲給テ去バコソ能見タリケリ。嬉ク聞セ給ヒタリトテ。三位局ヲ召見參ノ宣ヒケルハ。無隔聞エ侍ル事。返ヤ神妙ニコソ。是ヘ可奉入カ。其ヘ可進ル。御心ニ概叶ハン事ヲ計ヒ給ヘト。三位申ケルハ。理ナキ御志ノ色ニ顯。御座ス御事申モ。中々愚ニ覺テコソ候ヘ。是ヘ入レ進センモアレヘ入ラセ御座サンモ。旁其憚アレバ。御心安モ思召バカリ。只離別レ給フト御披露候ヘカシト。中納言宣ケルハ。避ト申タラハ。我志ニハアラレ。如何ニモ奉公ノ爲ニコソ。悲キ別ヲセンズルニト聞エケレハ。三位其ハ二三日モ過侍テコソ。此由ヲバ委申入侍ラメ。兼テ申タラハ。定テ御心元ナク思召ベシト計ヒ申ケレバ。サラバ其義ニコソトテ。中納言北方ニ此由被申ケリ。女房ハ事ニ觸テ。我ヲ捨ントオボスニコソ。懸ル様ヤ有ベキト。無限涙ニ咽給ヒケレハ。中納

言モ袖ヲ絞テ此ノ世ニハ隔ナク。志ノ色ヲ顯シ。後世ニハ繋念無量功トカヤノ罪ヲモ遁給ヘカシト。爲我爲人カク思侍ルニヤ。愚ノ御事ニハ非ズト。様々誓言ヲ申給ヘバ。其上ハ不及力トテ。心ナラヌ別ヲシ給ケルコソ糸惜ケレ。此由角ト披露有ケレハ。三位局ノ計ニテ迎取給ヒケリ。大臣ハウツヽナラズトソ思ハレケル。中納言ハサスガ飽ヌ別ノ道ナレハ。忍ノ涙ヲ流給ヒケリ。彼朱明カ妻ヲ遁レ志。管寧カ金ヲ断シ情モ角ヤト覺テ最ヤサシ。其後三位局大臣ニ角ヤト申ケレハ。大ニ驚給テ。カクソ送給ケル

タクフベキ方モ渚ノウツセ貝クダケテ君ヲ思フトヲシレ

中納言此歌ヲ見テコソサテハ御心ニ相叶給ケルヨト。歎ノ中ニモ悦給ヒケレハ。例ナキ情也ト人申ケリ。成範中納言ノ

北方。花山院御臺盤所ニ成給タリト。世ニ波露有ケレハ。何者ノ讀タリケルヤラン。四足ノ柱ニ

花ノ山高キ樹ト聞シカド蛍ノ子カトヨフルヒロフハ

ト。此御臺所ノ御美モ嚴ク。情モ深ク御座ケル上。天下ニ類ナキ。繪書ニテソ御座ケル。紫震殿ノ御障子ニ。伊勢物語ヲ繪ニ書セ給フ御事アリ。昔貞親王ノ生レ給ヘル。御ウブヤニテ。人々歌讀侍リケル中ニ。御伯父方翁ノ

我門ニ千尋アル竹ヲ植ツレバ。夏冬誰カ隱ザルベキ

ト。讀タリケリ。御ウブヤハ親王ノ御産所也。其ウブヤノ前ニ鳳凰ノ千尋ノ竹ニ居タルヲ。カヽセ給タリケルカ。餘ニ目出度魂ヲ書コメサセ給タリケルコヤ。其後紫震殿ニ。時々笙ノ笛ノ調ブル聲アリ。人々此ヲ怪テ忍テ御覽シケレバ。千尋ノ

竹ニ書給ヘル。鳳凰ノ鳴音ニヅ侍ケル。難有御事也。昔忠平
中將ノ扇ニ書タリケル。郭公コヱ扇ヲヒラク度ゴトニ。郭公トハ
啼ケルナレ。宇治關白殿ノ中門ニ。圓心法師カ書タリケ
ル雞ハ。寒夜曉鳴事度々アリケリ。金峯山藏王權現ニ造
進シタリケル。定朝カ獅子狛犬ハ。社殿ノ上ニ吹合テ。大床
ヨリ落タリキ。定朝七代ノ孫。院賢法橋カ稲ノ木ヲ火。造進
シタリシ。芹谷ノ地藏堂ノ小鬼ハ。夜々失事有テ。曉ハ必ズ
露ニヌレテ本座ニアリ。近隣ノ里ニ女常ニ鬼子ヲ生。寺
僧怪テ金鐘ヲ以。件ノ鬼ヲ繫タレバ。其後鬼露ニモヱレス。女
鬼ヲ生事ナシ。繪ニ畫。木ニ造タル。非情ナレ共。物ノ妙ヲ極タル
事ノ精ヲ盡セル上。古王今ノ代モ不思議ナリケル事也。撫
此成範卿トハ。故少納言入道信西三男也。櫻町中納言

ト申事ハ。優ニ情深キ人ニテ。吉野山ヲ思遣ル。櫻ヲ愛シ給
ヒケリ。室ノ八嶋ヨリ歸上。後町ノ四方ニ吉野ノ櫻ヲ移植其
中ニ室ヲ立テ住給ケレバ。見人此町ヲバ。樋口町櫻町ト
申ケリ。又ハ此中納言櫻ノ名殘ヲ惜テ立行。春ヲ悲ミ。又
コン春ヲ待ワビ給シカハ。異名ニ櫻待中納言トモイヘリ。殊
ニ執シ思ハレケル櫻アリ。七日ニ咲散事ヲ歎テ。春ゴトニ花ノ
命ヲ惜テ。泰山府君ヲ祭ラレケル上人。天照太神ニ祈申
サ世給ケレバ。三七日ノ齡ヲ延タリケリ。サレバ角ゾ思ツヾケ
給ヒケル

千早振現人神ノカミタレバ。花モ齡ハノビニケルカナ

ト。人ノ祈實アリケレバ。神ノ靈驗アラタニソ。廿日中ニ咲散
花ナレ共。三七日ニテ遺アリ。君モ御感有テ。花ノ本ニハ此

人ヲツスベキトテ勅書櫻町ノ中納言トヅ仰ケル。二ハ徳子后ニ立給ヘ皇子御誕生有ケレバ。後ニハ建禮門院ト申キ。天下ノ國母ニ御座シ上トカク申ニ及ス。三ニハ六條攝政基實公ノ。北政所也。是ハ世ニ勝給ヘル琵琶ノ上手ニ御座キ。經信大納言ヨリ四代ノ門葉。治部卿上ノ流ヲ傳テ。流泉啄木ヲ極給ヘリ高倉上皇御即位ノ時御母代ニテ三后ニ准ル宣旨ヲ賜テ。世ニハ重キ人ニテ御座キ。白川殿トヅ申ケル。四ニハ冷泉大納言隆房北方ニテ。御子數多御座キ是又情アル女房ニテ。琴ノ上手トヅ聞エ給ヒシ。昔唐ノ白居易ハ。琴詩酒ノ三ヲ友トシ。常ハ琴ヲ引テ心ヲ養ヒ給ケル管絃ノ道ハ。ナヲザリナレ共。此ヲ調ルニ自ツレ〳〵ヲ慰ム事タリヌト書置給ケリ。彼樂天ノ筆ニ自

在ヲ得給テ。聊モ作給ヘル詩篇ヲ。ヨク人ニ被知給ヘリ。其中ニ。隨分管絃還自足。等閑篇詠被知人ト書給ヘル詩ヲ。北方常ニ詠メ心ヲ澄シ琴ヲ彈給ヘリケリ。太政入道ハ琴ヲ愛メ。女房達ヲ集テ。常ニ聞給ケル中ニ。秋風。鈴蟲。唐琴滝ド云。代ノ寶物四張アリ。西園寺ノ名主閑院少將。當麻寺。紅葉堀川侍從トテ。四天王ニ筭ラレタル。琴ノ上手ヲ招寄テ。常ニヒカセテ聞給ヘドモ。異ナル瑞相ハナカリシニ。此北ノ方。村雲ト云琴ヲ調ベ給ヘル時。色ヘノ村雲忽ニ聳テ。軒端ノ上ニ引覆。萬人目ヲ驚シ。入道感涙ヲ流シ給フ。狹衣ノ大將光源氏ノ君。管絃ヲ奏シ給シニ。天人景向シ給シモ。角ヤト被思知タリ。五ニハ近衛殿下基通公。北政所。形嚴クシテ。水精ノ玉ヲ。薄衣ニ裹タル樣ニ御衣モ透通テ見ヘケレバ。

父相國モ異名ニハ。衣通姫トゾヨハヽレケル。殿下モ角ト仰ケレバ。北政所モ我御名ト心得テ。替マシ〳〵テハ。互ニ咲給ケリ。歌ノ道ニ達シ。並ナキ御事也。中ニモ内ヨリ御使アリ。何事ゾト御尋アレバ。當座ノ御會アリ。日夕以前ト披露申ケリ。殿下不取敢。御裝束召レケルガ北政所ニ仰ノ有ケルハ。當座ノ御會爭カ其題ヲ可知ナレ共。頭辨心有モノニテ。密ニ五ノ題ヲ告申タリ。裝束シ侍ラン。其間ニ歌讀儲テ給ハラントテ。題ヲサシ置セ給ケリ。北政所コレヲ御覽シテ。打ウナヅキ給ツヽ。ヤガテ墨スリ筆染テ寫ズルマテノ御事ニ及ス。

古歌ヲ書ガコトク

春日山神祇

春日山カスメル空ニチハヤフル。神ノ光ハノドケカリケリ

鷲山釋教

ワレノ山オロス巖ノイカナレバ。雲モノコラズテラス月カゲ

是心是佛玉文

マトヒツヽ佛ノ道ヲモトムレバ。ワガ心ニヅダヅ子入ヌル

旅立空秋無常

草村ニヲク白露ニ身ヲヨセテ。フノ秋風ヲキノヾカナレキ

戀ノ昔舊跡

アルヽナキ宿ノヘキバニ匂アリ。イトヾ昔ノハナヅコヒシキ

已上五首。御裝束已前ニアリ。アノバレ儲サセ給タリケルニ。文字一モ引直サセ給ハス。日比ノ歌ヲ書ヨリモ猶奴クヅ有ケル。殿下是ヲ御覽メ。實ニ由〻シクモ遊バレタリトゾ申サセ給ケル。六(五)八七條修理大夫信隆卿ニ。相具シ給ヘリ。翠黛紅

顔ノ粧ヒ。花ヨリモ猶カウバシク。玉ノ簪照月ノ姿。アタリモ光ハカリナリ。歌ヨミ連歌シ。繪書花結アクマデ。御心情御座ス人也。サレ共五障ノ女身ヲ悲テ。常ハ持佛堂ニ入。佛ニ花香奉リ法華經クラニ讀覽ニ給テ。毎日御轉讀アリ。龍女ガ速成ヲ貴ミ。如説ノ往生ヲレタヒテ。菩提ノ道ヲヅ祈ラセ給ケル。人間有爲ノ榮耀ハ。兎テモ角テモ有ヌベシ。悟ノ道ノ知ベコリ。思ヘバ實ニ貴ケレ。七ニハ安藝嚴嶋ノ内侍ガ腹ノ娘也。指タル才藝ハナカリケレ共。美貌八人ニ勝給ヘリ。嬋娟タル兩鬢ハ。秋ノ蟬ノ翼。宛轉タル雙蛾ハ。遠山ノ色トヅ見エ紛フ。秋夜月ヲ待ハ。ツカニ山ヲ出ル清光ヲ見ガ如シ。夏日蓮ヲ思ヒ初テ。氷ヲ穿紅艶ヲ見ヨリモ潔シ。此御娘十八ノ年。後白河院ヘ參給ヘリ。更衣ノ后ニテヅ御座ケル

入道サシモナキ事セラレタリト申給ケリ。其上猛ナク失給ニケリ。母ノ内侍ハ。越中前司盛俊カ賜テ具シタリケルガ。盛俊一谷ニテ討レテ後ハ。土肥次郎實平ガ具シタリケルトヅ聞エシ。八ニハ九條院雑子。常葉ガ腹ノ娘成ケル。花山院左大臣ノ御臺盤所ニ親ク御座セバトテ。上臈女房三ツ御座ケリ。二條殿トモ申ケリ。又ハ廊ノ御方トモ申ケリ。大臣殿モ密ニ通給ケレバ。姫君一人出來給ヘリ。此女房和琴ノ上手ニテマシ〳〵ケル上。類ナキ手書ニテ御座ケレバ。手本賜ハラントテ。人々色々ノ料紙ヲ奉リ置タレバ。書モ敢給ズ。色々ノ料紙共傍ニ取置セ給タリケレバ。朝夕ハ錦ヲ曝ス砌トヅ見ヘケル。異本ニ云。八ハ大納言有房卿ノ北方也。繪書花結。諸道ニ達シ給ヘリ。ヘニ哀ニ深ク。人ニ情ヲ重クセリ。

女房ナレ共。聯句作文モ並ナク。手跡サヘ嚴ノ畫圖ノ障子ニ。百詠ノ心ヲ繪ニ書セ給テ。ヤガテ一筆ニ色紙形ノ銘ヲモ書給タリケレハ。院モ希代ノ女房ナリトゾ仰ケル。抑日本秋津嶋ハ僅ニ六十六箇國。平家知行ノ國三十餘箇國。既半國ニ及ベリ其上庄園五百箇所。田畠ハイクラト云數ヲ不知。綺羅充滿ノ堂上花ノ如ク。軒騎羣集ノ門前成市。楊州之金荊岫之玉吳郡之綾。蜀江之錦。七珍萬寶。一トシテ闕事ナシ。歌堂舞閣之基ト。魚龍雀馬之翫物。恐クハ帝闕モ仙洞モ。是ニハ爭カ增ルベキ。勢既ニ君朝ニナラビ。富又皇室ニ過タリト。自出度コソ被見ケレ。昔ヨリ源平兩氏朝家ニ被召仕テヨリ以來。他ニ不隨朝憲ヲ輕ズル者ヲバ。互ニ誡ヲ加シカバ。世ノ亂ハナカリキ。保元ニ爲義キラレ。平治ニ義朝討レシ後。未々ノ源氏。此コ彼コニ有シカ共。或ハ流サレ。或ハ討レテ。今ハ平家ノ一類ノミ。獨武威ヲ奪テ自政ヲ恣ニセシカバ。頭サシ出者ナシ。五代十代ノ末ノ世ヘデモ。誰カハ謗者有ベキトゾミエシ

日向太郎通良懸ノ頸事

平治元年ノ比。肥前國住人。日向太郎通良。野心ヲ挾テ。朝威ヲ傾ケントスル聞エアリシカバ。可追討之由。清盛朝臣ニ被仰下。勅命ヲ蒙テ筑後守家貞ヲ召テ申含。家貞西府ニ下向シ。通良ガ城ヲ押寄テ。度々ノ合戰ニ及ブ。城モ究竟ノ城也。主モ勇者成ケレバ。輙ク落ザリケレ共。月ヲ隔日ヲ重テハ。官兵ハ雲如ニ集リケレバ。賊徒ハ霧ノ如ニ散ケリ。永暦元年四月ニ。通良以下ノ黨類。三百三十五人

詞取之由。家貞カ許ヨリ交名ヲ注ノ申上タレバ。清盛朝臣
事ノ由ヲ奏聞ス。同五月十五日。鳥羽殿ニ御幸有。通
良并子息通秀親良以下ノ首七。御桟敷ノ前ヲ渡サレテ
被御覽。清盛朝臣御前ニ候セリ。御隨身ヲ以テ各字ヲ御
尋アリ。家貞馬上ニテ。名謂ス。事ノ體ユヘクヅ見ヘケル。家
貞甲ヲ著ル郎等二百餘騎ヲ相具シ渡ル。容貌美麗ニシテ。進
退見ツベカリケレバ。今日ノ見物只家貞ニ有トゾ上下稱
シアヘリケル。七條川原ニテ檢非違使通良等ガ首ヲ請取
テ。大路ヲ渡シ獄門ノ木ニ懸ラルケリ。同六月三日先小除
目オコナハル。平頼盛朝臣。從四位上ニ叙ス。舎兄清盛朝
臣鎮西ノ住人通良ヲ。追討ノ賞トゾ聞ヘシ。同廿日太宰大
貳。清盛朝臣正三位ニ叙ス。勲功ノ賞ニ依テ。忽ニ越階ス。

基盛打殿下御隨身。付主上上皇除目相違事

去五月廿二日ニ。殿下參内シ給ケルニ。清盛卿ノ二男遠
江守基盛ガ車ヲ門外ニ立タリケルヲ。御隨身ヤリノケヨト
責ケレ共。牛飼童不承引。惡口シケレバ。御隨身等。弓ヲ
以テ打タリケル程ニ。基盛カ郎等太刀ヲ拔。御隨身等ヲ
取籠テ。散々ニ打伏ケレバ。陣ノ内外騒動シケリ。是ゾ平家ノ
亂行ノ初トハ聞エシ。去又元保元年ニ。鳥羽院晏駕ノ後
ハ。兵革打續。死罪。流刑。解官。停任。常ニ被行テ。海内モ
不靜。世間モ不安。就中永暦應保ノ比ヨリ。禁裏ノ近習ヲ
ハ。仙洞ヨリ被召禁。仙洞ノ近習ヲバ。禁裏ヨリ被カヽ刑。主
上上皇御父子ノ御間ナレハ。何事ノ御不審カハ有ベキナレ
共。思ノ外ノ事共有ケルトゾ聞エシ。是世ノ及澆醨之俗。人挾

梟悪之心ニ故ナリ。永暦元年二月廿一日ニ。上皇内裏ニ
臨幸有テ。清盛朝臣ニ仰テ。權大納言經宗。別當惟方
卿ヲ被召捕ケリ。經宗卿ハ外戚也。惟方卿ハ叔父也。縱ハ
虐ノ犯アリテ。五刑ノ法ヲ被行トモ。罪名ニ及ズ。忽ニ繫索
セラレンヤト。世傾ケ申シ人疑ヲナセリ。同三月十一日ニ。
經宗卿ハ阿波。惟方卿ハ長門ヘ被流ケル。六月十五日
ニ。又前出雲守光保朝臣ノ息男。備後守光宗。薩摩國
ヘ配流セラル。是ハ上皇ヲ危フ奉ラント謀由聞エケレバ。其
咎ヲ被行ケリ。光宗ハ配流ノ由宣下ノ後。自害シテ失ニケ
リ。應保元年九月十五日ニハ。左馬權頭平頼盛。右少辨
時忠被解官ケリ。是ハ高倉院ノ宮ニテ御座ケルヲ。太子ニ
立テ奉ラント謀ケル故也。又上皇政務ヲ不レ可聞召之由

清盛卿申行ヒケリ。君ノ威忽ニ廢レ。臣ノ驕速ニイチレルシ。
同日ノ除目ニ以テ信範。被任右少辨。以時忠可レ被補
五位藏人之由。院ヨリ執申サセ給ケルニ。彼兩人ヲバ被解
官。以長方被任右少辨。以重方被補五位藏人ケリ。
天子ニハ無父母。上皇ノ仰ナレバトテ。政務ニ私不可存ト仰
ケルトゾ聞エシ。誠ニ求其人。被置其官トモ。上皇御素意ニハ
忽ニ相違セリ。延喜ノ聖主ノ天子ニ無父母トテ。寛平法皇
ノ仰ヲ背セ給ケルヲバ。御誤リトコソ申傳ケルニ。思召出サセ給
ハザリケルニヤ。諫諍ノ臣モ諂ケルニヤ。政道ニハ叶給ヘシ共
孝道ニハ大ニ背ケリトゾ。同二年六月二日。修理大夫資賢。
少將通家。上總介雅賢等。見任ヲ被解却。是ハ去ル比。
賀茂社ニ參籠スル男有。事ノ體怪シカリケレバ。社司彼ノ男

ヲ搦捕テ。内裏ニ奉タリケレバ。子細ヲ被召問ケリ。天子ヲ奉
咒詛之由。白状シタリケリ。若此人人ノ造意ナリケルニヤ。係
リケレバ高キモ賤モ。安キ心ナシ。只深淵ニ臨。薄氷ヲ踏ガ如。
主上トハ二條院上皇トハ。後白河法皇。此法皇ノ御譲リ
三ノ。主上ハ御位ニ即給フ。父子ノ御中ナレバ。百行ノ中ニ
孝行充第一也。上皇ノ叡慮ニ叶御座ベキニサモナクテ。角
思ノ外ノ事共アリ。其中ニ人耳目ヲ驚シ。世ニ傾申事アリキ

二代后付則天皇后事

故近衛院ノ后ニ太皇太后宮ト申ハ。徳大寺ノ左大臣公
能ノ御娘也。中宮ヨリ大皇太后ニ上ラセ給タリケルカ。先
帝ニ後レサセ給テ後ハ。九重ノ中ヲハ住憂思召テ。近衛川
原ノ御所ニソ移リ住セ給ケル。先朝ノ后ノ宮ニテフルメカシ

ク幽ナル御有様ナリケルカ。求暦應保ノ比ハ御年廿七八
ノ程ニモヤ成セ給ケン。天下第一ノ美人ニテ御座由聞エサ
セ給ケレバ。主上御色ニソムル御心有テ。密ニ高力士ニ詔シ
外宮ニ引求サセ給テ忍ツヽ。彼大皇太后宮ヘ御書有ケレ
共。后ウツヽナラズ思召レケレバ。更ニ聞召入サセ給ハス。主上ハ
忍ノ御書モ度重リケレ共。空キ御書ナリケレハ。今ハ。ヒタスラ
穂ニ顯ハレ〳〵テ。后入内有ベキ由。父ノ左大臣家ニ宣旨ソ
被下ケリ。此事珍キ御事也。先帝ノ后宮ニ代ノ后ニ。奉祝
事イカヾ有ベキトテ。公卿会議有ケレ共。各難意得之由。被
申ケリ。但シ先例ヲ可相尋之旨。議定アリ。遠異朝ノ先
蹤ヲ考ルニ。則天皇后ト申ハ。唐太宗ノ后。高宗皇帝ニハ。繼
母也。太宗崩御シ給シカバ。御髪ヲ〻ロシ。比丘尼ト成テ感

業寺ニ籠ラセ給テ。先帝ノ御菩提ヲ吊給ケリ。高宗位ヲ繼給タリケルカ。我宮室ニ入テ。政ヲ助給ヘト。天使五度勅ヲ宣ヘケレ共。敢テナビキ給ハス。高宗自感業寺ニ臨幸有テ云。朕私ノ志ヲ以ッ。愚幸ヲ勸奉ル。ニハアラス。唯天下ノ政ノ爲ナリト仰ケレ共。皇后先帝ノ崩御ヲ訪ヒ奉ランガ爲ニ。適獨門ニ入。爭カ一度世俗ノ塵裏ニ歸テ。王業ノ政務ヲ營マントテ。確然トノ動給ハズ。扈從ノ群臣宇勅命横ニ取奉ル如ク。都ニ返シ入レ奉レリ。后泣々長髮ヲ御座シテ。重テ皇后ト成給ヘリ。高宗則天概共ニ。政治給シカバ。御在位三十四年。國富民樂ニケリ。サテコソ彼御時ヲ二和ノ御宇ト申ケレ。高宗崩御ノ後。皇后女帝トノ。廿一年有テ。位ヲ中宗帝ニ授給ケリ。年號ヲ神龍元年ト云。我朝ノ文武天

皇。慶雲二年乙巳歳ニ相當レリ。唐則天皇后ハ。大宗高宗兩帝ノ后ニ立給フ。異朝ノ例ハアレ共。本朝ノ先規ヲ勘ルニ。神武天皇ヨリ以來。人王七十餘代。未ニ代ノ后ニ立給ル其例ヲ聞ズ。諸卿僉議一同ナリケレバ。法皇モ此事不可然ト度々申サセ給ケレ共。主上ノ仰ニハ。天子ニ無父母。萬乘ノ寶位ヲ忝セン上ハ。此程ノ事敵慮ニ任ベシトテ。既御入内ノ日時ヲ被宣下ケル上ハ。不及子細。后ハ此御事被聞召ケルヨリ。引カヅキ御座シツヽ。御歎ノ色深クヲ見エサセ給ケル。先帝ニ後レ進セシ。久壽ノ秋ノ始ニ。草葉ノ露ト。モ消。家ヲ出世ヲ遁タリセハ。懸ル例ナキ事ハキカザラヽシトヲ思召レケル。父ノ大臣彼宮ニ參テ。世ニ隨フヲ以テ人倫トシ。世ニ背クヲ以狂人トスト云事侍リ。既ニ

詔命ヲ被下之上ハ。子細ヲ正及レ申。タヾトク進セ御座スベキ也。是偏ニ愚老ヲ助サセ給ベキ。孝養ノ御計ヒタルベシ。知スヌ又此ノ末ニ皇子御誕生ナンドモ有テ後ニハ。君モ國母トヽ祝レ愚老モ又帝祖トイハルベキ。家門繁昌ノ榮花ニテモヤ侍ラント。様々コレラヘ申サセ給ケレドモ。皇后ハ御返事ナカリケリ。只御涙ノミデスヽメ世給ケル。何トナキ御手習ノ次ニカクゾ。書スサミ世御座ケル

浮節ニ沈モハテヽ川竹ノ。世ニタメレナキ名ヲバナガレツト世ニハ如何ニヤ漏ケルヤラン。哀ニ情レキ撫レニゾ申ケル。既ニ御入内ノ日時ニモ成レカハ。父ノ大臣ハ供奉ノ上達部。出車ノ儀式心モ詞モ及ス。小夜モ潮深ケヽレバ。后ハ御車ニ被扶載御座ケリ。色深キ御衣ヲバ正被召。殊ニ白

御衣十計ヲゾ召レケル。内ヘ參セ給ニレカハヤガテ恩ヲ蒙リ麗景殿ニゾ渡ラセ給ケル。ヒタスラ朝政ヲスヽメ申サセ給フ御有様也。彼紫震殿ノ皇居ニハ賢聖ノ障子ヲ被立タリ。西ニ二十六人。東ニ二十六人。三十二人ノ賢聖アリ。是ハ後漢功臣二十八將。王常。李通。竇融。馮茂ノ四將ヲ具ノ也。其外。伊尹。第五倫。虞世南。太公望。閎里先生。李勣司馬毛九トカヤ。手長。足長。馬形ノ障子。鬼間。李將軍ガ姿ヲ寫セル障子モ有。金翌ガ書ケル荒海ノ障子ノ北ナル御障子ニハ遠山ノ有明ノ月ヲゾ書レタル。故近衛院。未幼帝ニテ御座ケル。當時何トナキ御手スサミニ。書曇カサセ給タリケルガ有シナカラニ少モ替ザリケルヲ。御覽ジケルニモ。先朝ノ昔ヤ戀シク思食ケン。御心所世ク

テ思召ツヾケサセ給ケルコソ。御イタハシケレ

思キヤ憂身ナガラニ延キテオナジ雲井ノ月ヲミントハ

トサテモ此間ノ御ナカラヒ。昔ヲレタフ御恕。今ヲ専ニスル御情。旁ワリナキ御事共ナリシ程ニ。永萬元年ノ春ノ比ヨリ主上御不豫ノ御事有トハエシカバ。其年ノ夏ノ始ニ成シカバ。事ノ外ニ重ラセ給ケレバ。大藏太輔紀兼盛ガ娘ノ腹ニ。二歳ニナラセ給フ皇子ノ御座ケルヲ。皇太子ニ立奉ルベキ由聞エシ程ニ。六月二十五日。俄ニ親王ノ宣旨ヲ被下テヤガテ其夜位ヲ讓リ奉セ給ヒキ。何トナク上下周章タリ。我朝ノ童帝ノ例ヲ尋ヌレバ。清和帝九歳ニシテ。天安二年八月ニ文德天皇ノ御讓ヲ受サセ給シヨリ始レリ。周公旦ノ成王ニカハリツヽ。南面ニヲ一日萬機ノ政ヲ行シニ准テ。外祖忠仁公。幼主ヲ扶持シ奉リ給ヘリ。攝政又是ヨリ始レリ。鳥羽院五歳。近衛院三歳ニテ。御即位有シヲコソ。トシト人々思申シニ。是ハ僅ニ二歳イマダ先例ナシ。物騒シクゾ聞エケル

新帝御即位。同崩御。付郭公并雨禁獄事

永萬元年六月二十七日。大極殿ニテ。新帝御即位ノ事アリシニ。同七月廿三日ニ。春寛法印御驗者ニ參リ祈申ケルニ。御邪氣始テ顯テ讃岐院ノ御靈トゾ聞エシ。同二十八日ニ。新院隱レサセ給ニケリ。御歳二十二ニ位ヲサラセ給テ。僅ニ三十餘日也。天下憂喜相交テ。不取敢事也。同廿九日。修理大夫頼盛朝臣。參川守光雅。主典代置能等。陰陽師宣憲ノ相輿ノ。御葬ノ地點ズ。宣憲次第ノ事共

勘へ申ケル。日時ハ母后ノ御衰日ヲ撰ビ。方角ハ公家ノ御方忌ヲ用ル。是偏ニ宣憲ガ失錯ノミニ非ス。臣天下ノ怪異タリ。淺増カリシ事共也。同八月七日後葬送アリ。扈從ノ公卿衣冠ニ纓ヲ巻テ。各歩行セリ。右大臣經宗。中宮大夫實長。別當公保。新中納言實國。大宮宰相隆季左大辨資長。右大辨雅頼。平宰相親教卿也。押小路ヲ西ヘ。鳥丸ヲ北ヘ。衣笠山ニ至リ。暁天ノ程ニ荼毗シ奉ケリ。左中將頼定朝臣御骨ヲ奉懸。香隆寺ニ渡シ入奉ル。實ニ哀ナリシ事共也。后宮ヨリ奉始。御身近召仕シシ女房。恩録アツク賜ヘリシ。卿相雲客御遺ヲ慕ヒ。後レ奉ラジト歎悲給ケレドモ。死ニ隨フ習ナケレハ。只御一所送捨進セテ。泣々還合セ給。此ハ秋ノ最中ノ事ナレハ。雲井ヲ照ス月影。尾上ニ

カヨフ風ノ音。荻ノ上風身ニシミ。萩ガ下露置ヲセバ。山分衣シホレツヽ。ヌレヌ所ゾナカリケル。叢ニスダク蟲ノ音。ヤヽモ。我訪フ心地。イトヾ哀ノ増リケル。サテモ宮ニ還レドモ。無御跡ノ習ニテ。高キモ賤モ。涙ノ露ニグ袖ヌラス。近衛大宮公先規ナキ二代ノ后ニ立セ給タリケレ共。サヽデ御幸モ御座サスイツレカ此君ニモ。後レサセ給シカバ。ヤガテ御髪オロサセ給テ。北山ノ麓ニ引籠ラセ給ナルコソ哀ナレ。今年ノ夏郭公。京中ニミチ〳〵テ。頻ニ群リ啼ケリ。此鳥ハ初音ユカシキ鳥ナリトテ。スキ人ハ深山ノ奥ヘモ尋入。例多キ事ナルニ。今ハケレカラヌ事ナリトテ。人耳ヲ特ル程ナリケルニ。一羽ノ郭公空ニテ食ヒ合。殿上ニ飛落タリケリ。野鳥入ノ室。主人將ノ去トイフ本文アリ。此怪異ナリトテ。二羽ノ郭公ヲ捕テ。獄舎ニ被

禁ニ入リ。白川院御時。金泥ノ一切経ヲ被書寫。法勝寺ニテ御供養ト被定。其日時ニ及レテ甚雨有ケレバ。延引ス。又日時ヲ被定タリケレバ。甚雨ニ依延引ス。既ニ三箇度マテ延引アリ。被定タリケレバ。甚雨ニ依延引ス。第四箇度ニ適御供養有ケル日。空掻曇リ雨降テ。俗モ僧モシレホ〜トノ法會ノ儀式最興醒タリケレバ。天氣逆鱗有テ。雨ヲ器ニ受入テ。獄舎ニ被入タリレヲコリ。珍キ事ニ申シニ。郭公ノ禁獄。先例ナシ。位ヲ去ル給フ事。今ニ不レ始事ナレ共。六月ニ御座ヲスベラセ給テ。何シカ七月ニ崩御。怪鳥殿上ニ入ケル故ニ。市本文モオモヒレラレ哀ナリ

額打論。付山僧燒清水寺并會稽山事

新院御葬送ノ夜。延暦興福兩寺ノ大衆。額打論シテ。狼藉ニ及ベリ。其故ハ。主上御葬送ノ作法ハ。諸寺諸山ノ僧徒等。悉ク供養シテ我寺々ノ額ヲ立。次第ヲ守テ御共ヲ仕ル。南都ニハ一番ニハ。東大寺ノ行ヲ立テ額ヲ打。二番ニハ興福寺ノ行ヲ立テ額ヲ打。其外末寺々々打並ブ。北京ニハ。一番ニ延暦寺ノ行ヲ立テ額ヲ打。山々寺々次第ヲ守テ立並ル。先例也。爰ニ山門ノ衆徒。今度ノ御葬送ニ。イカバ思ケン。東大寺ノ行ノ次ニ。延暦寺ノ額ヲ打タリケレバ。興福寺ノ大衆ノ中ニ。東門院ノ觀音房。勢至房ト云惡僧アリ。三枚皮威ノ大荒目ノ鎧。草摺長ニサヾメカレ。三尺五寸ノ太刀。前低ニハキ。興福寺ノ額ヲ大長刀ニ取具シ。高ク指上テ延暦寺ノ額ノ上ニ。我寺ノ額ヲ立副ヘテ。皆紅ノ月出シ久ル扇投。山門ノ衆徒ニ向テ申ケルハ。先規ニ任テ額ヲサゲラ

レテ。衆徒安堵せラレヨヤトテ。高聲ニ申ケレ共。山門ノ衆徒
良久申旨ナシ。観音房勢至房。長刀ニテ延暦寺ノ額ヲ
二刀切テ。衆徒ノ所存其心ヲエス。我ト思ハン大衆ハ。落合ヤ
ト詞テ馳廻ケレ共。落合者共ナシ。二人ノ者ハウレシヤ水
鳴ハ瀧水ト歌テ。オレコダシ。一時計舞タリケル。延暦寺ノ
大衆。先例ヲ背キ狼藉ヲ出ス程ナラバ。其庭ニノ手向ヘカ
ベキニ。臆病ノ至リ歟。所存ノアルカ。一言ヲモイハザリケリ。一天
ノ君。萬乗ノ主世ヲ早セサセ給ヌレバ。心ナキ草木ニデモ。猶愁
ノ色有ベシ。況人倫僧徒ノ法ニ於ヲヤ。而ルヲ懸濁衰キ事シ
出ス式作法散々ト有ケレハ。高キモ卑モ。ヲメキ叫。東西ニ迷
ケルコソ不便ナレ。同八月九日。山門ノ大衆下洛スト云披
露アリ。巷説一ツニ非。或ハ清水寺ヘ押寄テ可焼拂トモ云。

或上皇大衆ニ仰テ。事ヲ南都ノ會憤ニヨセテ。平相國清盛
ヲ可誅被詐由聞エケリ。兵庫頭頼政。大夫尉信兼。左衛門
尉源重貞。同尉為經。康綱等ヲ切堤ヘ差遣被守護。内
藏頭教盛朝臣。立烏帽子ニ冑ヲ著る若狭守經盛朝臣
ハ。折烏帽子ニ冑ヲ著ス。大夫尉貞能已下。甲冑ヲ著ノ皇
居ノ四面ヲ守護ス。陣ノ口ニハ雑役ノ車ヲ以テ。逆茂木ニ引。
隨兵東西ニ馳迷フ。偏ニ迷惑ノ體也。換非違使。季光ヲ切
堤ヘ遣ノ。形勢ヲ見せラル。歸參シテ申ケルハ。衆徒數百人山
路ヨリ。善提樹院ヲ透テ靈山ニ群集る。山路ニ於テハ相防
ニ無力由ヲ申入ケル。清盛ノ事ト聞エケレバ。右兵衛督
重盛卿。修理大夫頼盛朝臣。左馬守宗盛朝臣已下。
一族ノ人々。六波羅ニ馳集ル。衆徒ヲ防グ心ナクシテ。取ノ

城内ヲ守ル。去程ニ大衆ノ下向ハ平家ノ事ニハ非。去ル七日ノ額立論ニ。會稽ノ耻ヲ雪ンガ為ニ。興福寺末寺ナレバ。清水寺ヲ焼拂ハントテ下ルト云ケレバ。清水法師老少ヲイハズ騒アヘリ。俄事ニテハアリ。物具ノ有モ無モイハス。二手ニ分テ相待ケリ。一手ハ清水清閑寺ノ境堀切テ。逆茂木引テ瀧ノ尾ノ不動堂ヨリ。木戸口マテ。五百餘騎ニテ固メタリ。一手ハ山井ノ谷ノ懸橋引落シ。西ノ大門ニ垣楯ヲ食堂廻廊木戸口マテ。一千餘騎ニハ過ザリケリ。京童部ガ申ケルハ。蟷螂ノ手招毒蛇ノ蜘蛛ノ張ル網襲飛鳥ト云ハ此事ニヤ。山門ノ大勢ニ敵ニテ。危キトゾ笑ケル。山門大衆追手搦手二手ニツクル。搦手ハ大關小關四宮川原モ打過テ。苦集滅道ヤ清閑寺。歌中山マテ責寄タリ追

手ハ西坂本。下松。今道越ヲ打過テ。清水坂。晴尾ノ觀音寺マテ責付タリ。清水法師モ思切。櫛ノ面ニ進出テ。散々ニ戰ケレドモ。大勢雲霞ノ如クナリケル上ニ。時刻ヲ經ズ。ヤガテ坊舎ニ火ヲ懸タリ。折節西ノ風烈ク吹テ黒煙東ニ覆ヒケレハ。寺僧今ハ防戰フニ無ク力。本尊ヲ負。坊舎ヲ捨テ。延年寺赤築地ニノ閑道ヘヅ落行ケル。サテコソ山門ハ會稽ノ耻ヲ雪ヌト思ケレ。會稽ノ耻ヲ雪トハ。異朝ニ稽山ノ洞ト云所アリ。蛮山トモ名。會稽山トモ申也。呉越ノ境ニ在リ。之トカ。兩國境ヲ論ル代々ニ軍絶ズ。此山ニハ乗多生ノ。蛮蠻ヲツクリ。絲ヲ出シ綿ヲ成故也。越國ノ允常王ト。呉國ノ闔閭王ト。此山ヲ論シテ。合戰絶ザリケル程ニ。呉王軍ニ討レテ。越王知レ之。越王ノ子ニ。勾踐ト云王アリ。呉王ノ子ニ。夫差ト

云王アリ。互ニ親ノ敵成ケレバ。勾踐思ケルハ。夫差ガ父ヲバ我父誅レ之サレバ我ヲバ敵ト思テ定テウタント思フ心有ラ下テ。軍ヲ起ノ戰程ニアヤマチテ勾踐被虜ダリ。呉國ニ止誠ラレテ本國ニ歸事ヲエズ。勾踐木ヲコリ草ヲカラヌ計ニ奉公シケレハ。死刑ヲ被宥召仕ハレケリ。夫差病スル事有キ。療術カナキニ似タリ。醫師ノ云。屎ヲ舐テ味ラ以テ存ヲ知ラレト云ケレ共。彼ヲ飲ントス臣妾ナレ。囚勾踐ガ云。我無益ノ謀叛ヲ起ノ。誤ツテ虜レヌ。其各死刑ニアリト云ヘドモ。君ノ惠ニ依テ命ヲ助ラレタリ。厚恩生々ニ難報。須恩ヲ謝セント云テ飲ン之。夫差其志ノ深キ事ヲ感ノ本國ニ返遣シツ。勾踐後ニ大軍ヲ起ノ。終ニ呉王ヲ亡シケリ。會稽山ヲ論ノ軍ニ負テ屎ヲ飲ハ恥也。本國ニ還テ敵ヲ討テ彼山ヲ知ハ恥ヲ雪ル也。故ヘニ會稽ノ恥ヲ雪トイヘリ。去七日ハ山門額ヲ切レテ恥ニ及。今九日ニハ清水煙ト上テ面ヲ濯グ。實ニ恥ヲ雪ト云ベキニヤ。京童部ガ云ケルハ。山僧ハ田樂法師ニ似タリ。打敵ヲバ打返サデ。傍ナル者ヲ打樣ニ興福寺ノ衆徒ニ額ヲキラレテ。清水法師カ頭ヲハリタリトゾ笑ヒケル。昔嵯峨天皇ノ后ニ春子女御ト申ハ。二條右大臣。坂上田村丸ノ御娘也。御懷任ノ時。御產平安ナラバ。我氏寺ニ三重ノ塔ヲクヽレト。御願ヲ被立タリ。其驗ニヤ平ニ王子御誕生アリ。第三ノ王子ニ門居親王トハ此御事也。御宿願ヲ遂ラレンガ爲ニ。官府ヲ中承和四年ニ建立セラレタリシ。三重ノ塔婆。空輪高ク光テ寶齡雲ニ響シ。毛燒ニケリ。猛火コヽニ止テ。本堂一宇ハ殘タリ。大衆既ニ歸上ラントシケルニ。東

塔南谷教光坊大阿闍梨仙性トテ。學匠ノ而モ大惡僧
ナリケルガ。進出テ參議ノ云。罪業本ヨリ所有ナシ。妄想
顛倒ヨリ起ル。心性源深ケレバ。衆生即佛ナリ。罪トノ更ニ
ナシ。本堂ニ火ヲサセヤクト申ケレバ。衆徒尤々トテ同ク。
手々ニ火ヲトモシツヽ。堂ノ四方ニ付タレバ。黑煙ハルカニ
立上リ。赤日ノヒカリモ見エザリケリ

清水寺縁起。并上皇臨幸六波羅事

此清水寺ト申ハ。昔大和國子嶋寺ニ沙門アリ。其名ヲ賢
心ト云。淀河ヲ渡給ケルニ。水ノ中ニ金色一筋ノ流レアリ。是
直事ニ非ズトテ。流ニ隨ツテ源ヲ尋ヌ山城國。愛宕郡ニ。八
坂郷。東山ノ邊リ清水ノ瀧ノ下ニ至レリ。怪シレゲナル草庵ア
リ。中ニ白衣ノ居士アリ。年齡既ニ老々トシテ。白髮サラニ

皓々タリ。賢心問テ云。汝ハ是誰人ゾ。爰ニ住ノ幾年ヲカ經
タルト。居士答云。我ヲバ行叡ト云。此地ニ住事數百歲。心
ニ觀音ノ威神力ヲ念ジ。口ニ千手ノ眞言ヲ誦ス。我ニ東國
修行ノ志アリ。汝慥ニ聞。此草庵ノ跡ハ伽藍ヲ立ベキ勝地也。
前ナル株ハ觀音ノ粉木也。必汝宿望ヲ果スベシト云テ東ヲ指
テ去ニケリ。賢心此ニ住ノ。六時三昧怠ラス練行坐禪年經
ケル程ニ。坂上ノ田村丸。東山遊獵ノ次ニ。種々ノ瑞異ニ驚
テ。賢心ト師檀ノ契ヲ結ツヽ。寶龜十一年ニ。始テ伽藍ヲ草
創シ。金色八尺ノ千手觀音ヲ造立ス。延曆大同ニ佛殿
ヲ造闊テ。清水寺ト號セシヨリ以來。星霜已ニ四百餘歲ニ
及ケリ。嵯峨天皇御宸筆勅書ニハ。以清水寺ヲ爲鎮
護國家之道場ト被宣下タリ。誠古仙經行之聖跡。大悲

利物之靈嶽也。天子萬乘ノ聖主モ。薩埵之弘誓ヲ仰。上
民七道ノ男女モ。闡提ノ悲願ヲ憑ケリ。懸ル目出キ大伽藍
精舍ハ。煙ト上ツヽ。佛像灰ト變シケン。千手ノ廿八部衆照
見。誠ニ難知。衆徒カリ燒拂テ歸登ニケリ。平相國清盛徒
ニ數千ノ軍兵集置トイヘ共。更ニ恐尺ノ災難ヲ救フ事ナシ。
衆徒惡行ヲ致セドモ。武勇防制セズ。王威ノ衰微。佛法ノ
破滅。此時ニアリ。清水寺燒失ノ後。切堤川原ノ武士等
陣頭ニ參ズ。子細ヲ爲被召問。賴政ヲ陣ノ中ニヌサル。賴政
ハ白キ鬼紋紗ノ水干。小袴ニ藍摺ノ帷著テ。立烏帽子ニ太
刀帶テ。胡籙ヲ不負ハ。淺瀨ヲハケリ。渡邊源三競ト云。郎
等一人相具セリ。誠ニ花ヤカニ由アリテ見エタリ。子息伊豆ノ
守仲綱已下ノ隨兵ハ門外ニ候ヒケリ。源氏ノ作法優ニヲ

異ノ他也ト。見物ノ上下感心申ケリ。兼ノ巷說ニ。清盛卿
ノ事ト聞エケレハ。六波羅ニハ武士雲霞ノ如馳集ル。大内ヲ
守護スル者モ平將ノ亭ニ馳行ケレハ左衛門督重盛卿
ハ當家追討ノ披露一定傳聞ニコソ參テ。御氣色伺ハントテ。院參シ給ケル程ニ。上皇ハ又聞巷ノ說ヲ爲被謝仰ニ
六波羅ヘ御幸アリ。左衛門督公光卿。治部光隆卿供
奉セラレタリ。重盛卿道ニテ參會シ給ヒ。御供申テ奉入平中
納言清盛ハ用心ノ爲ニヤ所勞ト稱ノ見參ニ入ザリケレハ。空
ク還御有ケリ。河陽之蒐春秋猶忌之トイヘリ。忽ニ君臣ノ
道ヲ忘テ。今上下ノ禮ヲ背ケレ共。君トノ其罪ヲ責ルニアタハ
ス。臣トシテ其咎ヲ恐ルヽ事ナシ。朝家ノ恥武門ノ驕。只此
事ニアリ。是又平家ノ狼藉ノ第二度也。重盛卿御送ニ參

テ。六波羅ヘ歸リ。父ニ向テサテモ一院ノ御幸コソオソレ覺ユ
ト宣ケレバ。清盛ハ思召寄仰ス旨ノ聊モアレバコソ。平家追
討ト云事モ。洩聞エラメナレバ。御幸有トテモ。不可被打
解憤ラレケレバ。重盛ハ此事ユメ〳〵色ニモ詞ニモ出サセ給ベ
カラズ。保元平治ヨリ。逆臣ヲ誅罰シテ。勲功端ヲ多シ。
今ニ至マデ。君ノ御爲不忠ヲ存セラレズ。何ニ依カ一門追
討ノ御企有ベキ。加様ノ事ニコソ人ノ心ツキテ。實ナキ事
ニ惡事ヲモ思出ス事ニ侍ル。向後モ叡慮ニ背給ハヌ人ノ
爲ニ惠ヲ施サント思召バ。神明三寶ノ御加護有ベシ。去
バ御身ノ恐有ベカラズトテ。被立ケレバ。清盛此重盛ハ。ユ
ヘシク大様ノ者カナトゾイハレケル。一院ハ六波羅ヨリ還御ノ
後。疎カラヌ近臣按察使入道資賢ヲ始テ。人人御前ニ候
ハレケルニ。仰ノ有ケルハ。平家追討トハ。何者カ云出ケルヤラ
ン。加様ノ事ハ浮説ナレ共。世ノ大事ニ及ブナリト被仰ケレバ
諸人口ヲ閉テ物申事ナシ。西光法師折節御前近ク候
ケルカ。天ニ口ナシ人代テイヘリ。驕テ無禮ナルハ是天罰ノ徵
ナリ。清盛以外ニ邂分也。亡ン瑞相ニヤト申ケレハ。人人
聞之。壁ニ耳アリトテ拔足シテ退出スル族モ有ケリ。清水寺
回禄ノ後朝燒大門ノ前ニカクゾ書テ立タリケル。觀音ヨク
火坑變成池ハ。イカニト誓ケル事ゾト。翌日返札ト覺シクテ。
歷劫不思議ノ事ナレハ。不及陳ヲトゾ書タリケル。又イカナ
ル跡ナシ者ノ態ニカ有ケン。札ニ書テ立副タリ。補陀落山ニ
在聞ナレハ。火不能燒ノ驗ハナシトソ書タリケル。哀ニ淺增
キ中ニモ。オカシカリケル事共也。同十日祇園所司奏狀

ヲ進ル。興福寺衆徒當社ヲ焼拂ハントス。官兵ヲ賜テ可レ
被レ守護一不一然ハ神體ヲ奉レ負可レ登山トゲ申レ入ケル。又山
階寺ノ大衆。參洛ヲ企テ。延暦寺末寺末社ヲ可レ焼拂一之
由。言上シケレバ藏人木工頭重方。勅定ヲ蒙ツテ彼寺別
當ニ仰ケルハ。仏意趣可レ上奏一不一押一參洛者別當已下。可
レ有レ遠勅罪トゲ被レ宣下ケル。同十二日。法務僧正惠信。
官ヲ被レ辭又源義基。伊豫國ニ配流。是ハ先日彼僧正卒
義基等發向南都。是ハ山階寺ノ大衆。今度蜂起之間。
僧正可レ與力者可レ免衆勘之由。衆儀ヲ成ケレバ。僧正承
諾ノ發向ス。仍被レ行其罪ケリ。先帝崩御之後。今日相
當ニ七日ニケリ。被レ行刑罰ケルコソ。最甚レシ覽ケレ

源平盛衰記卷第二終